

ルソーとラスキン

「文明社会」に於る「自然」と「人間」の救済

飯 岡 秀 夫

ROUSSEAU and RUSKIN

Relief of “Nature” and “Human being” in “civilized society”

Hideo IIOKA

目 次

- 序 . 「近代文明」の光と影
 - 本稿のテーマ
- 第一章 「文明の病患」
 - . ルソーの文明批判
 - 「自然」と「文明」との衝突
 - . ラスキンの文明批判
 - 「弱者」の犠牲の上の富と娯楽
- 第二章 病因は何か
 - 「文明の病患」出現の論理
 - . 病因は「Industrie（道具的生産）」だ
 - ルソー
 - . 病因は「マイナスの労働」 「メラの水」だ
 - ラスキン
- 第三章 「文明的自由」と「生の増進」をめざして
 - ルソーとラスキンを通底するもの
- 第四章 「文明的自由」の実現
 - 「内部感覚」と「共通感覚」の復権にもとづく
 - 1 . 「内部感覚（Sens intérieur）」について

2 . 「共通感覚 (Sens commun) 」について

3 . 「文明的自由」のベース

「内部感覚」と「共通感覚」にもとづく「同化」

4 . 「道徳的自由」の実現

5 . 「文明社会的自由」の実現

第五章 「生の増進」

「固有価値」 「実効的価値」の上に立つ

1 . 経済学の目的

「生の倍増・増進」

2 . 「富」と「富の反対物」

3 . 「固有価値 (intrinsic Value) 」

4 . 「実効的価値 (effectual Value) 」

5 . 「生の増進」 「勇敢な人」の育成

結 び . ルソーとラスキンからのメッセージ

本稿で使用されている省略記号は次のとおりである。

. ルソー関係

1 . Cr.....Projet de constitution pour la Corse, 『コルシカ憲法草案』

2 . Ct.....Du Contract social, 『社会契約論』

3 . E.....Emile, ou de l'éducation, 『エミール』

4 . G.....Du Contract social [1^{ere} version], 『ジュネーブ草稿』

5 . I.....Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes, 『人間不
平等起原論』

6 . N.....Julie, ou la Nouvelle Héloïse, 『新エロイーズ』

7 . R.....Les rêveries du promeneur solitaire, 『孤独な散歩者の夢想』

8 . S.....Discours sur les sciences et les arts, 『学問芸術論』

9 . 道 『道徳書簡』、『ルソー全集』、第十巻、白水社

10 . 岩岩波文庫

11 . 全 『ルソー全集』、白水社

なお、ルソーの引用文はすべてプレイヤー版からのものである。その巻数とページ数を示した。(Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau, Bibliothèque de la Pléiade, 5Vol., Gallimard, 1956 ~ 1995.)

. ラスキン関係

1 . Se.....SESAME AND LILIES, 『ごまとゆり』

ルソーとラスキン（飯岡）

原書：NO219 of Everyman's Library, LONDON:J.M., DENT & SONS LTD, 1944.

訳書：木村正身訳、『中公バックス、世界の名著、52、ラスキン、モリス』、中央公論社

2 . U.....UNTO THIS LAST, 『この最後のものにも』

原書：The Social and Economic Works of John Ruskin, 6 Volumes, Routledge / Thoemmes press, 1994.

訳書：飯塚一郎訳、『中公バックス、世界の名著、52、ラスキン、モリス』、中央公論社

3 . M.....MUNERA PULVERIS, 『ムネラ・プルウェリス』

原書：The Social and Economic Works of John Ruskin, 6 Volumes, Routledge / Thoemmes press, 1994.

訳書：木村正身訳、『ムネラ・プルウェリス 政治経済要義論』、関書院

. その他

1 . 『文明論』拙著『ルソーの「文明論」 「再生」の行方』、高文堂出版社、2002 .

2 . 『経済論』拙著『ルソーの「経済論」 「本然」と「逸脱」』、高文堂出版社、2003 .

序 . 「近代文明」の光と影

本稿のテーマ

「近代文明」の進歩・発展を推進する主要な原動力のひとつに、「効用と利潤と成長とを至上目的として追求する経済」⁽¹⁾と、それをリードする「経済学」と、それらを支える「啓蒙思想」「功利主義哲学」との三者の協働があることは疑いえないであろう。以上の三者「経済」と「経済学」と「思想・哲学」を土台として推進されてきた「近代文明」はその輝かしき光の下に、影 病患 の部分を随伴し、その暗き影の部分は、我々の時代に於て、はっきりとその姿を現してきている。

「環境汚染・破壊」と「人間の汚染・破壊（人間性の腐敗・墮落、心の病、自我の拡散・自己喪失etc）」がそれである。

本稿は、「近代文明」につきまとうこの影（病患）の部分にいちはやく気づき、そこから「環境（自然）」と「人間」とを救済せんとした二人の先駆的な思想家、ルソーとラスキンの「思想」と「経済学（論）」とをとりあげ、その現代的意義を問わんとするものである。

ルソー（1712～1776）とラスキン（1819～1900）とはその生きた時代に約1世紀の時代的へだたりがあり、それ故、両者の間には、両者を取り囲む経済的社会的状況に多大の相違があるとはいえ、両者は、「近代文明」の影（病患）が、根本的には、「自然」と「文明」との衝突に、現象的には、「不平等社会」によってもたらされたという基本認識に於て共通している。

しかも、両者に共通するのは「文明の病患」あるいは「文明悪」の元凶に関する基本認識だけではない。両者はさらに、「近代文明」の影（病患）の部分撃ち、そこから「環境（自然）」と「人間」とを救済せんとする根拠・視角に於て共通している。すなわちそれは、人間の自然本性なかんづく感情や情念を重視する、ロマン主義的な根拠・視角である。

本論で詳論されるように、一方でルソーが「近代」という「啓蒙」の光の時代のなかで生きながらも、近代という時代が内包する「技術的理性」の悪をいち早く見抜き、「内部感覚 (Sens intérieur)」と「共通感覚 (Sens commun)」というキーワードをもって「環境（自然）」と「人間」の救済を志向したのに対し、他方でラスキンはヴィクトリア王朝時代「ヴィクトリア体制」

という「近代文明」の光が最大の輝きを示していた時代に、「塵芥（物質的富）を神と崇める」不条理を見抜き、「固有価値 (intrinsic Value)」と「実効的価値 (effectual Value)」というキーワードをもって、「環境（自然）」と「人間」の救済を志向したのである。ルソーからラスキンへの流れが環境と人間の救済を志向する「環境思想・経済学」の源流をなすと考えられる所以はそこにある。

本稿は「内部感覚」・「共通感覚」(ルソー)と「固有価値」・「実効的価値」(ラスキン)というキーワードに焦点をあてて、「近代文明」の影（病患）の部分撃ち、そこからの「環境（自然）」と「人間」の救済を志向した、二人の先駆的な思想家の「思想・経済学（論）」の核を論ずることをテーマとするものである。

第一章 「文明の病患」

ルソーとラスキンとは、それぞれの時代 - ルソーの場合にはフランス「絶対主義体制」、ラスキンの場合にはイギリス「ヴィクトリア体制」 - に文明の病患を見出し、それを時代批判というかたちで、根底から批判するなかで、それぞれの思想と経済学（あるいは経済論）を展開した思想家である。つまりルソーとラスキンにあっては「文明の病患」認識とそれへの批判がそれぞれの「思想・経済学（論）」の出発点をなしているのである。それゆえ我々は、ルソーとラスキンとは、それぞれの時代にどのような「文明の病患」を見出し、それをどのように批判したのか、から論じ始めなければならない。

・ルソーの文明批判

「自然」と「文明」との衝突

ルソーの「思想・経済論」が我々の時代に有効性を持つ根本のところは、ルソーが「自然」と「文明」との衝突の危機をいち早く察知し、それに警鐘を鳴らしたところにある。ルソーは「絶対主義体制」下の政治システムとそこに生きる同時代人の内面とのそれぞれに「自然」と「文明」との衝突をみたのである。⁽²⁾「道具的生産」 それに基づく人間の自然支配を土台として成立し、「富者」と「貧者」との階級対立を内包する政治システムにあっては、そこに生きる人間（「社会人」）は

「自然」と「文明」との分裂状態で生きざるをえないとしてルソーは次のように言っている。

「社会状態にあって自然の感情の優越性をもちつづけようとする人は、なにをのぞんでいいかわからない。たえず矛盾した気持ちをいただいて、いつも自分の好みと義務とのあいだを動揺して、けっして人間にも市民にもなれない。自分にとってもほかの人にとっても役にたつ人間になれない。それが現代の人間、フランス人、イギリス人、ブルジョワだ。そんなものはなににもなれない」(E., t. , P.249 ~ 250, 岩上, P.28)

ルソーはここで「社会状態（文明社会）」に生きる人間 「フランス人、イギリス人、ブルジョワ」 はいつも「自分の好み（内なる自然）」と「自分の義務（内なる文明）」とに引き裂かれて、「自己分裂」のなかで生きざるをえなくなっていると、「文明の病患」をえぐりだしているのである。

ルソーにあってこの「自然」と「文明」との衝突・分裂状態は、「不平等社会」を帰結することによって、さらに、次の三つの「文明の病患」を創出するとされている。

第一は人間性の性悪化 - 「倫理」の腐敗・墮落 - である。「悪徳」と「不自由と不幸」の蔓延である。

ルソーは文明社会に「富」と「地位（名誉）」と「権力」の三つの種類の「不平等」の存在をみているが、彼は文明社会に生きる「社会人」たちは不平等に存在する「富」と「地位」と「権力」を手に入れようと相争い、「自我」を閉ざし、性悪になり、あらゆる悪徳を身につけていくと論じ、さらに、そこにあっては、「貧者」は自分が意志しなかったことを無理矢理やらされるという「不自由と不幸」を生き、他方「富者」は肥大化した「欲望の奴隷」になり、その結果「人への依存」状態に陥り、「貧者」よりももっと深刻な「不自由と不幸」を生きていると論じている。文明社会にあって人間は肥大化した欲求にかられて「相互依存」を余儀なくされ、その「相互依存」のなかで、人々は自由を失い自然全体と同胞との奴隷状態におかれているとルソーは論ずるのである。

「以前は自由であり独立であった人間が、いまや、無数の新しい欲求のために、いわば、自然全体に、とりわけその同胞に屈従するようになり、彼はその同胞の主人となりながらも、ある意味ではその奴隷となっているのである。すなわち、富んでいれば同胞の奉仕を必要とし、貧しければその援助を必要とする。と同時に、中位の者でも同胞がいなくては到底やっていけない。」(I., t. , P.174 ~ 175, 岩, P.101)

ルソーは文明社会（政治制度）に内在する「自然」と「文明」との衝突 「不平等」が人間の「自然の傾向」を変化させ人間を腐敗・墮落させるとみていたのである。

第二は「放縦」の果ての「人格の喪失」である。それは肥大化した欲望に突き動かされ、「欲望の奴隷」 「人への依存」を生きる「社会人」の究極の姿である。「不平等」の到達点に於て彼らは「知恵なき理性」を駆使して「徳なき名誉」と「幸福なき快樂」をもとめ、「無なる者」に墮落しているとルソーは次の言葉をもって糾弾している。

「これがすなわち不平等の到達点であり、円環を閉じ、われわれが出発した起点に触れる終極の点である。ここですべての個人がふたたび平等となる。というのは、今や彼らは無であり、家来はもはや主人の意志のほかなんらの法律ももたず、主人は自分の欲情のほかなんらの規則をもたないで、善の観念や正義の原理がふたたび消滅してしまうからである。」(I., t. , P.191, 岩, P.126 ~ 127)

第三は「自己逃亡」、「自己喪失」である。

「自然」と「文明」との衝突状態にある「政治制度」に生きる「社会人」- 特に上流階級の人たち - は、第二章で詳論する論理によって、外部からの刺激を求めて、「内部感覚」の使用を忘れ、自分に立ち帰ることを忘れ、自分を失い、自己逃亡を企てている。自分の外に心を投げ出して陽気になっている、とルソーは「文明人(社会人)」を批判するのである。「文明の病患」を生きる「文明人(社会人)」の「自己逃亡」、「自己喪失」を歎く、ルソーの言葉のかずかずを紹介しておこう。

「社交界の人は完全に仮面をかぶって生きている。ほとんどいつも自分自身であることはなく、いつも自分とは縁のないものになっていて、自分に帰ることを余儀なくされたときには、窮屈な感じがする」(E., t. , P.515, 岩中, P.45)。「邪悪な人間は自分を恐れ、自分をさけている。自分の外へ心を投げだして陽気になっている」(E., t. , P.597, 岩中, P.167 ~ 168)。「かれらはあなたをだますために自分をだましているのだ。かれらは自分自身と一致していない。かれらの心はたえずかれらに反対している。そしてしばしばかれらの口もかれらを反駁している」(E., t. , P.660 ~ 661, 岩中, P.260)

「未開人」は「内部感覚」をつかって自分自身のなかで生きているのに「文明人(社会人)」は「肉体感覚」をつかって常に自分の外で生きている。「未開人」と「文明人(社会人)」のこの対照こそ、ルソーの文明批判の核をなすものであったのである。

・ラスキンの文明批判

弱者の犠牲の上の富と娯楽

ラスキンは「ヴィクトリア体制」下のブルジョア文化に「文明の病患」をみ、それを根底から批判した。それはブルジョア階級に属するラスキンの自己批判を意味したが、ラスキンの「思想・経済学」はその自己批判から出立し、豊かな富にあぐらをかく、「ヴィクトリア体制」下のブルジョア文化、なかんづくそれを支える「富(wealth)」と「富裕(riches)」批判として展開されている。「ムネラ・プレウリス(塵芥の贈りもの)つまり物質的富」を崇拜する者への批判である。

それではラスキンは「ヴィクトリア体制」下のブルジョア文化に、具体的に、どのような「文明の病患」をみ、何をどのように批判したのであろうか。

まずラスキンは「ヴィクトリア体制」が「読書文筆」を、「科学」を、「芸術」を無視していると批判し³⁾、さらに、「自然」を軽蔑しているとして、次のように批判する。

「皆さまは、自然を軽蔑してこられました。いいかえれば、自然の風景についてのあらゆる深遠・神聖な感情を、軽蔑しておいでです。」(Se, P.33, 訳, P.204)

この言葉から我々は「自然美」の破壊を批判し⁽⁴⁾、「自然」の「固有価値」の復権を求める、ラスキンの「環境思想」の一端を読みとることができる。特にラスキンがその心に保有する「自然の風景についてのあらゆる深遠・神聖な感情」は、ルソーに発し、ラスキンを経て、エマソン、ソローに継承される「環境思想」の原点をなしているところのものである。

ラスキンは、さらに、「ヴィクトリア体制」は富と娯楽を追求することにかまけて、「同情心」を忘れ、道徳的に腐敗堕落していると批判する。「ヴィクトリア体制」下の富裕のさなかで、靴職人マイクル・コリンズ（58才）はその勤勉と自助努力にもかかわらず、餓死した⁽⁵⁾。そのことを悼み無念がるラスキンの言葉は我々の心をうたずにはおかない。ラスキンはこの悲劇の原因を娯楽を求める国民的願望と教会の無力にありとみた。そして次の言葉で「ヴィクトリア体制」下の娯楽の追求 放縦な生活による、国民の同情心の欠如を批判している。

「われわれの『国民的』願望と目的は、ただ、娯楽を得ることだけです。われわれの『国民的』宗教とは、教会の儀式をとりおこなうことであり、こちらが娯楽にふけっている間、衆愚たちを黙々とほたらかせておくため、眠気をさそうような真理〔それとも不真理^{アントルース}〕を説教することなのです。このような娯楽の必要が、のどを焼き、眼をうつろにする熱病のように、われわれをひつつかんで、無感覚・放縦・無慈悲にしているのです。」(Se, P.40, 訳, P.213)

ラスキンは、さらに、この放縦と無感覚・無慈悲を生む娯楽は、金もうけという虚偽の仕事の帰結であるとみて、魂を失ったブルジョア文化を次のように批判している。

「人々の他人に対する奉仕・同情の態度が誠実であるとき、かれらの情感はすべて着実・深遠・持続的となり、自然の鼓動が身体を活気づけるように魂を活気づけます。ところがわれわれは、なにも真実の仕事がないので、男性的エネルギーのすべてを、金もうけという虚偽の仕事にそそぎこんでいるのです。」(Se, P.40, 訳, P.213)

最後に我々は「ヴィクトリア体制」下のブルジョア文化への根本的批判としての、ラスキンの基本認識を示さねばならない。それはブルジョアが享受している富と娯楽は貧乏人の犠牲の上に成立しているという基本認識である。その基本認識はラスキンの時代批判、文明批判のベースとして、ラスキンの経済学を貫いている。

「皆さまは、まさにそんな人々の仕事、その力、その生命、その死のおかげで生きていながら、しかもかれらに感謝をなさることがない。皆さまの富も娯楽も誇りも、皆さまが軽蔑するか忘却しきっているこういう人々がいなくては、すべて存在しえないでしょう。」(Se, P.39, 訳, P.212)

そして、さらに、この富と娯楽を求める貪欲が戦争の真の原因であるという基本認識⁽⁶⁾と、ブルジョアはあらゆる思想・信条を独り占めするために、下層の者たちを暗愚のままにとどめている

という基本認識がつづく⁽⁷⁾。

ラスキンはブルジョアの富は労働者の労働力の搾取の結果であるということを見破っていたのである⁽⁸⁾。ラスキンはそのことを「ヴィクトリア体制下」の社会を「機織り」にみたてて、次のようにいっている。

「しかし、この機織りのはじめの図案全体を、つぎの大法則が支配している。すなわち、成功とは、(社会が競争の諸法則によって導かれているあいだは)隣人にたいしてその仕事の指導権を握ってこれによって利潤を博しうるほどに勝利をえることの謂いにつねにほかならないということ、これである。これこそあらゆる巨富の真実の発源なのである。なんびとも、自分の個人的労苦によるだけでは、たいして富裕になれるものではない。その人自身の手による仕事は、賢明に指導されれば、なるほどつねにこの人自身およびその一族を養い、また適当なかれの老後の準備をととのえるだろう。しかしかれは、他人の労働に徴課するなんらかの方途を発見することによってのみ、はじめて潤沢となることができるのである。」(M., P.151~2, 訳, P.237)

ラスキンも、ルソー同様、「自然成長的な経済」による「自然」と「文明」との衝突とそれが生み出す「不平等社会」に文明的諸悪の元凶 「文明の病患」の病因 をみていたのである。

第二章でそのことを論じよう。

第二章 病因は何か

「文明の病患」出現の論理

ルソーもラスキンも、共に、「文明の病患」の根本原因を「自然成長的な経済」による「自然」と「文明」との衝突 「不平等社会」の出現に求めている。以下、ルソーとラスキンとが「文明の病患」の原因とその出現の論理をいかに論じているか、その論点を要約することにしよう。

・病因は「Industrie (道具的生産)」だ ルソー

ルソー思想のもつ不朽の生命力は、なんといっても、「文明の病患」の根本原因を、「人間の本源的構造」からとらえかえしているところにある。ルソーは人間に固有の特質としての「自己完成能力(特にその技術的理性の側面)」の発揮に「文明の病患」の根本原因をみているのである⁽⁹⁾。

ルソーの「経済論」における、「自己完成能力」の発揮を根本原因としての、「文明の病患」の出現の主要論理は以下のとおりである。

人間の技術的理性としての「自己完成能力」の発揮は、道具や技術をつかったの自然支配としての生産 ルソーはそれを「アンデュストリ(道具的生産)」と呼んでいる をおしすすめ、そこに経済的進歩・発展が推進される。「自己完成能力」の発揮 「アンデュストリ(道具的生産)」

「経済の進歩・発展」が「利己愛(amour propre)」にもとづいて「自然成長的」に進展するかぎり、別言すれば、「利己愛」にもとづく「自然成長的な経済⁽¹⁰⁾」が進行するかぎり、そこに「文

明の病患」が出現する。何故なら、その場合、「自然成長的な経済」を土台として、「自然の体系」に調和しないどころか、かえって、それに反する「人為の体系」が築かれ、「自然」と「文明」が衝突するからである。

この衝突は「事物の力」の増大というかたちであらわれる。ルソーにあってはこの「事物の力」の増大こそ、「文明の病患」の根源としてとらえられているのである。

それでは「事物の力」という言葉でルソーは何を意味していたのであろうか⁽¹¹⁾。それは、「アンデュストリ（道具的生産）」 「自然成長的な経済」によって拡大再生産されていく、「物質的財貨」および「相互依存的な経済・社会関係」の総合的力を意味している。

さて、「利己愛」にもとづく、「自然成長的な経済」によってもたらされる、「事物の力」の増大は「文明人」の「情念（欲望）の火」を煽り、「文明人」をして「情念（欲望）の奴隷」におとしめ、「人への依存」をさらにおしすすめていく。それだけではない。「事物の力」の増大は、人間の「肉体感覚」 人間の五つの感覚器官による外部からの刺激を受けとる感覚 への刺激を増大し、その結果、「文明人」は外的世界に関心を奪われ、そのぶん、「内部感覚」 「自分自身」および「自分自身の存在」を感じとる感覚 の使用を忘れていく。自分自身にたちかえり、自分自身を感じずるチャンスを失っていく。自己を喪失していくのである。

以上の「自己完成能力」の発揮 「アンデュストリ（道具的生産）」 「自然成長的な経済」 「事物の力」の増大 「欲求の肥大化 『肉体感覚』のみの使用」と「内部感覚」の衰退 「人への依存」と「自己喪失」が、ルソーに於る「文明の病患」の原因と出現の基本論理である。

この根本原因と基本論理から、さらに、次の二つの「文明の病患」の原因と論理が派生する。

第一は「事物の力」が生み出す「不平等」という「文明の病患」の原因である。

まず最初に「アンデュストリ（道具的生産）」 「自然成長的な経済」 「事物の力」の増大は「富」の上の不平等 「富者」と「貧者」 をもたらした。ルソーに従えば、「冶金」と「農業」という「二つの技術」つまり「アンデュストリ（道具的生産）」が生産力の増大 富の蓄積 「富者」と「貧者」の出現という革命を生み出したのである。

「事物の力」の増大は、さらに、「富」の上の不平等をベースとして、「地位（名誉）」と「権力」の上の不平等を押しすすめていく。

その結果、文明社会に生きる人々は、富による物質的な欲求充足に加えて尊敬されるよろこびと支配することの快樂とを知ることになり、不平等に存在する「富」と「地位」と「権力」をめぐって相争い、それらを獲得する諸手段、諸方策を講ずるなかで、邪悪になり道徳的に腐敗・墮落していく、とルソーは論ずるのである。

派生的に出現する、第二の「文明の病患」の原因は、「アンデュストリ（道具的生産）」 「自然成長的な経済」 「事物の力」の増大 「不平等」を容認しかつ合法化する「政治制度」である。ルソーに従えば、それはあくまで富者のための、「虚偽の社会契約」によって成立したとされている。「部分譲渡的」な「虚偽の社会契約」によって成立した「政治制度」であるが故に、そこには、

「利己愛」にもとづく「自然成長的な経済」「事物の力」「不平等」が温存されるどころか、かえって合法化され、「^{サンダツ}寡奪」が「権利」とさえされてしまっているのである。

そのような「政治制度」にあつては、一方に於て立法活動が法治国家としての「法（正義）の体系」を築いていくが、他方に於て「利己愛」にもとづく「自然成長的な経済」「事物の力」が「欲望の体系」を築いていく。そこにあつては「立法の力」と「事物の力」がせめぎ合っている。「文明（立法の力）」と「自然（事物の力）」とが衝突しているのである。

その結果、そこで生きる「文明人」は「好み（自然）」と「義務（文明）」とに引きさかれて生きざるをえなくなっている、とルソーは論ずるのである。

・病因は「マイナスの労働」「メラの水」だ ラスキンの

ラスキンは彼の時代の「文明の病患」の病因を三つの面からとらえている。第一は「自由放任」下にある「自然成長的な経済」であり、第二はそれが創出する「不平等」であり、第三はそれらを支える「古典派経済学」である。ラスキンはそれら三つのものを彼の時代の悲劇の元凶として根底から批判しているのである。

以下、その具体的な内容をみていこう。

ラスキンは、彼の「すべての経済論者のうちでいちばん偉大な人々は誰かといえば、それは『自由放任』の教義にいちばん反対した人々にほかならない」(M., P.177, 訳, P.268)という言葉からもうかがい知ることができるように、「自由放任」下の「自然成長的な経済」に「文明の病患」の第一の病因をみとめた。何故ならそれは「物質的富」を神としてあがめることによって、「生の増進 (advancement in life)」をはかる 魂を活気づけ、生命を生産し、広げ、豊かにする 「プラスの労働」「生命の水」の水路を断ち、死を生ずるような「マイナスの労働」「メラの水」の水路をきりひらいているからである。

ラスキンはいう。「労働」「富」には二面性がある。それが知恵によって導かれた場合（計画的になされた場合）には「生命の水」となり、勝手にまかされた場合（自然成長的な場合）には「メラの水」つまりあらゆる害悪の根源になるのだと⁽¹²⁾。

ラスキンは「自由放任」にとってかわって、「備えを堅める諸徳性」「^{シム}慎慮」「分別、正義、勇氣、節制など」をもって経済を指導せよと主張しているのである⁽¹³⁾。つまりラスキンは高い道徳性をもち、かつまた、知恵と賢明さをもつ、「哲人」の指導を期待しているのである⁽¹⁴⁾。

第二の病因は「自然成長的な経済」が生み出す「不平等」である。

ラスキンは「富裕」となる術は「貨幣蓄積」の術であると同時に、「不平等」をつくり出す術であり、「ヴィクトリア体制」下の「富裕」は「不平等」をつくり出す術の所産であるとして不平等社会に於る道徳的腐敗を批判している。

そもそも「富」の「不平等」というのは、「他人を支配する力」の「不平等」を意味する。「不平等社会」にあつては「富という名のもとに、実際に人が欲するものは、本質的には他人を支配する

力である」(U., P.44, 訳, P.82)。「不平等」の上に成立する「商業的経済……は、個人の手に、他人の労働に対する法的ないし道徳的請求権、あるいは支配力を蓄積することを意味するのである」(U., P.42, 訳, P.80)。

富者と貧者の間の、この他人の労働に対する支配力、法的・道徳的請求権が「ヴィクトリア体制」下の「富裕」の根底にあり、その「富裕」が人々をして「娯楽」にうつつをぬかさしめ、そこに於る「放縦」と「貪欲」が人々を無感動・無慈悲にし、戦争をひきおこす真の原因になっていると、ラスキンは論ずるのである。

第三の病因は「自然成長的な経済」と「不平等」を支える「ポリティカル・エコノミー（古典派経済学）」である。

ラスキンの「ポリティカル・エコノミー（古典派経済学）」批判は熾烈を極めていいる。まずラスキンはそれが「社会的情愛の力」とは無関係に「社会的活動についての有利な規則」が決定されうるといふ、誤った考えにもとづいて展開されていると、次のように批判している。

「これまで、さまざまな時代に、多くの人類の心をとらえてきた迷いのなかで、おそらく最も奇怪な　またたしかに最も信用のおけない　ものは、近世のポリティカル・エコノミーという自称の科学であり、それは社会的活動についての有利な規則が、社会的情愛の力とは無関係に決定されうるといふ考えにもとづいているものである。」(U., P.1, 訳, P.60)。

次いでラスキンは、それが「人間はすべて骨格であると仮定し、靈魂の否定の上に無味乾燥な進歩の理論をうちたてている」と批判する⁽¹⁵⁾。

さらにラスキンは、「多数の人命と多額の富が危険に瀕しているきびしい危機にあたって、経済学者は無力であり　実際、唾同然である」(U., P.5, 訳, P.62)と、その「この世の現状に対する適用性」を否定している。ラスキンは「ポリティカル・エコノミー（古典派経済学）」を実用に適さないとみているのである。

以上の批判を支えるラスキンの「ポリティカル・エコノミー（古典派経済学）」批判の根幹は、その「投下労働価値」説にもとづく「富」概念の批判にある。

「古典派経済学」の「労働価値」説にもとづく富概念がいかに誤ったものであるかを、ラスキンはヴェネチアの「ティントレットの天井画」とパリの「石版画」との対比に於て論じている。

ラスキンは次のように主張する。「労働を価値の源泉とかがえるなら、かくも念をいれて刻んだ石版石の方が（ティントレットの）絵の方よりずっと価値が大きいはずであろう」(M., PREFACE, 訳, P.5)　しかし石版画は実は富ではなく、富の反対物である、それは「虚偽の財富」であるどころか、「富」の反対物、真実の「負債」なのであると。

「イントリジカルにいえば、この歡樂の石版画はじつは富ではなくして、かえって富の反対極であった。パリはまさにこれを生産するのに投じた労働量だけ、絶対的ポワアティ『貧乏』を超えるかわりに、それ以下に沈められ

たのである。石版画はただに虚偽の『^{リッチズ}財富』であるにとまらなかつた。それらはけっきょくは償われねばならぬところの真実の『負債』なのであった。その償いのありかたがどのようなものであるかは、リヴォリ街の現在のすがたがこれを物語っている。

しかも終始、あのヴェネチアの色あせた天井画こそ、絶対的な、また測りしれぬ富なのであった。」(M., PREFACE, 訳, P.5~P.6, 印は筆者)。

ラスキンが「イントリジカルにいえば (Intrinsically)」という時、そこにラスキンに於る「富」概念の解釈がえ 「投下労働価値」にもとづく「富」概念から「固有価値 (intrinsic Value)」 「実効的価値 (effectual Value)」にもとづく「富」概念への解釈がえ の問題が登場するが、その問題は第五章で詳論することにしよう。

最後に、ラスキンの「古典派経済学」への痛烈な批判を引用して、本章を結ぶことにする。

「われわれが今日一国民として生命を保持していることは、すべて少数の意志強固で忠実な心の持主が、われわれ大衆に教えられている経済諸原理を、断固として否定し、軽蔑していることにおのずからあらわれているのである。そしてこの経済諸原理は、それがうけいられるかぎり、ただちに国民的破滅を導くのである。」(U., P.37, 訳, P.78)

ラスキンはここで少数のエリートがこの経済原理を断固として否定しているから、どうにか国民的生活が保たれているのであって、ひとたびそれがうけいられれば、ただちに国民的破滅が帰結するといっているのである。

第三章 「文明的自由」の実現と「生の増進」をめざして

ルソーとラスキンを通底するもの

ルソーもラスキンも、共に、「文明の病患」を克服して、「文明社会」に於る「自然」と「人間」の救済を、より具体的にいえば、「文明社会」の内部で、「文明的自由 道徳的 (morale)、文明社会的 (civile) 自由」の実現 (ルソー) と「生の増進」(ラスキン) とをめざした思想家である。

ここでルソーがめざした「文明的自由」の実現ということと、ラスキンがめざした「生の増進」ということとの内容を比較検討してみると、両者の思想内容は著しく類似し通底している。

両者はいかに類似し通底しているか。それを論ずることが本章のテーマである⁽¹⁶⁾。

まず「文明的自由」の実現ということと「生の増進」ということを支える、あるいはそのベースをなす、ルソーとラスキンとの「人間観」の類似から論じはじめねばならない。ラスキンが「われわれは感情を働かせるかぎりでのみ人間なのです」と次のようにいう時、我々は「感ずる」ことに存在の根拠を求めるルソーの人間観をきくおもいかられる。

「われわれは人間ですから、感情はわれわれのために事実良いものなのです。いや、われわれは、感情をはたらかせるかぎりでのみ人間なのであり、われわれの名誉は、われわれの熱情とぴったり正比例しているのです。」(Se., P.23, 訳, P.194)。

両者は、共に、人間の「理性」的側面よりも「感情」や「情念」的側面を重視しているのである⁽¹⁷⁾。次に引用するラスキンの言葉は「理性はわたしたちをだますことがあまりにも多い」(E., t. , P.595, 岩 中 P.164) とか「冷たい理性は決して赫々たる事を何一つ行ったためしが無い」(N., t. , P.493, 岩.(三), P.162) というルソーの言葉と響き合っていないであろうか。

「理性はただ、真実なものとはなにかを決定することができるだけです、人類が神から与えられた情熱こそが、ひとり、神がよくつくりましたもうたものとはなにかを、識別しうるものなのです。」(Se., P.24, 訳, P.194～5)。

とはいえ両者は共に「感情」の両面性 否定的側面と肯定的側面 を見抜いている。たとえばラスキンは「あらゆる『卑俗』の本質は感情の欠乏にある」(Se., P.24, 訳, P.194) ということを前提として次のようにいっている。

「人間に可能な感情自体がなんでも悪いというのではなく、それが未訓練なときにだけ悪いのです。感情の高貴さは、その力と正義とに依存しています。感情は、その力が弱いとき、また、つまらない道義のために発動するときに、悪いのです。」(Se., P.24, 訳, P.195)。

「感情」が光り輝くにはそれが「正義」に支えられることが必要なのであり⁽¹⁸⁾、それがつまらない道義につかえるならば、それは悪しき感情に墮するのだというのである。両者が「徳」の育成のベースとして、「感情教育」を重視するのも、正に、その一点にあったといつてよいであろう。

次にこの「感情」や「情念」の両面性ということと関連して、両者は「良心」 「道徳的な本能」(ルソー) 「義務を求める本能」(ラスキン) に関する見解に類似をみせている。次に引用する両者のその生得性に関する見解は相互に呼応しあっていないであろうか。

「人間の心の底には正義と美德の生得的な原理があって、わたしたち自身の格率がどうであろうと、わたしたちはこの原理にもとづいて自分の行動と他人の行動を、よいこと、あるいは悪いことと判断しているのだが、この原理にこそわたしは良心という名をあたえる。」(E., t. , P.598, 岩 中, P.169) 。……ルソー

「ところで、人間の心情には、まず、あらゆるほんとうの義務を求める一つの本能が、つねに内在しているものです。この本能は、消すことはできず、ただ、もしその真実の目的をはずすと、ゆがみ、腐敗するだけです。」(Se., P.72, 訳, P.259) 。……ラスキン

ルソーもラスキンも共に「良心」の生得性を認め、その根源を高きものを志向する「感情」・「情念」に求めている。ラスキンが「感情」のなかで最上のもは、それが「恒常的で正義にかない、

じゅうぶんの熱慮と平静な思想との産物である」(Se., P.23, 訳, P.196) 場合にかぎるといい切る時、ラスキンのいうその、「義務の本能」に発せられると考えられる、「最高の感情」は、ルソーのいう「良心」に極めて接近しているといわねばならないのである⁽¹⁹⁾。

第三の類似は、両者は共に、ルソーのいう「共通感覚」にもとづく「同感」を重視し、「正義」を知り、「感情」と「習俗」を高めるためには、「同感」こそ要になると考えている点である。つまり両者は共に、「共通感覚」にもとづく「同感」あるいは「同情」を欠く場合には人間は「卑俗」に墮するとみているのである。

ラスキンはそのことを「接触」あるいは「接触能力 (touch-faculty)」という言葉で次のようにいっている。

「人々はまさに、同情 迅速な理解 を、つまり、平凡ながらいちばん正確なことばに深い強調をこめていえば、心身の『触覚』ないし『接触能力』と呼べるようなすべてのものを欠くのに正確に比例して、永久に卑俗となります。」(Se., P.24, 訳, P.194)

ルソーもラスキンも共に、この「共通感覚」(ルソー)、「接触能力」(ラスキン) に「理性の案内者・浄め手」をみているのである⁽²⁰⁾。それ故にこそ、ラスキンは図書館に入り哲人の書き残した「蔵書」を読むことをさかんにすすめているのである。読書に於る「先哲」との「同感」のなかで「正しいものは何か」を感得することができる⁽²¹⁾。

第四は「文明的自由」の実現あるいは「生の増進」のベースをなす、ラスキンいうところの「プラスの労働⁽²²⁾」のイメージの類似である。ラスキンは「心のねがい」は「眼の光」となってあらわれるとして、それを生み出す「プラスの労働」のイメージを次の言葉で表現している。

「心のねがいはまた眼の光である。どんな景色も、常時飽くことなく愛^めでられるものではないが、喜びに満ちた人間の労働によって豊かにされる。田畑はなだらかに、庭園は美しく、果樹は実り、清楚^{せいじやう}な心あたたまる家屋敷の点在、生きものの声があざやかに響きわたるのである。音のしない大気に快いものはない。それが快いのは、小鳥の高声、昆虫のうなり声や鳴き声、人間の太い調子のことば、子供の気ままなかん高い声など低い流れに満ちているときだけである。生活の術^{ずべ}が学ばれるにつれて、あらゆる美しいものもまた必要であることが、ついには理解されるであろう。路傍の野草の花も、栽培された穀物と同様、野鳥も森の獣も、飼いならした家畜とおなじように必要である。」(U., 167-8, 訳, P.151)

自然と人為との調和のなかにある田園での「喜びにみちた人間労働」。そこに於る人間と人間との、人間と自然との「心」と「気」の交流。そこにこそ「眼の光」を生む根源があるというラスキンのこのイメージと思想はルソーの理想郷「クララン農場」のイメージとそこにもりこまれた思想⁽²³⁾に重なる。

こころみにルソーの『新エロイズ』から一文を引用してみることにしよう。

「人々は一日中歌を唱い笑いさざめきますが、そのために労働はますます捗るばかりです。……融和していればこそそのふざげ半分は喧嘩が生じますが、お互いにじらし合うのはどんなにお互いの心信じ合っているかを示すために過ぎないのです。……然るにここに行きわたっている甘美な平等は自然の秩序を元に復し、一方の人々に対しては教訓となり、他方の人々に対しては慰めとなり、あらゆる人々に対して友愛のきづとなっているのです」(N., t. , P.607~608, 岩. (四), P.40~2)。

ルソーとラスキンは共に、人々が「真実の仕事」に従事し、かつまた人間と自然、人間と人間とが融和し、「人々の他人に対する奉仕・同情の態度が誠実であるとき、かれらの情感はすべて着実・深遠・持続的となり、自然の鼓動が身体を活気づけるように魂を活気づける」(Se., P.40, 訳, P.213)と考えていたのである。

ルソーのいう「文明的自由」の実現ということとラスキンのいう「生の増進」ということとは、以上4点に要約したとき類似を内包して出現するものなのである。

それではルソーの「文明的自由」の実現とラスキンの「生の増進」とは具体的に何を意味し、両者はいかに類似・通底するのであろうか。

まず、ルソーの「文明的自由 道徳的自由と文明社会的自由」とは何を意味するのかからみていこう。

ルソーにあって「文明的自由」とは、本能や感情や情念にもとづく衝動 意志 行動の放縦をいったん停止・統制し、その上で、生活全体に秩序を与えて生きる「力」 具体的には「良心」や「法」 の下にある自由を意味する。「良心」にもとづいて「感情・情念」(「欲望」)の放縦を統制して生きる時、そこに「文明人」の享受する「道徳的自由」があり、「一般意志」「法」に従って私人の情念・欲望を統制して「公民」の義務を生きる時、そこに「公民」の享受する「文明社会的自由」がある、というわけである。

そしてルソーは「良心」や「法」という、情念(欲望)を統制する「力」を「徳」と呼んだ。従って、ルソーにあっては、「良心」にもとづいて「道徳的自由」を享受する「文明人」 その育成がルソー「家庭教育論」のテーマである も、また、「法」にもとづいて「文明社会的自由」を享受する「公民」 その育成がルソー「政治理論」のテーマである も、共に、「有徳の人」なのである。さらにいえば、この「有徳の人」育成 「文明的自由」の実現ということとは「内部感覚」「共通感覚」をベースにしてはじめて可能なものなのであるが、それについては次章で詳論することにしよう。

さてそれでは次にラスキンにあって「生の増進」とは何を意味するかをみていこう。

ラスキンにあって「生の増進」とは、生命を生産し、広げ、豊かにすること、つまり、「愛の力」、「歓喜の力」、「讃美の力」、なかんづく「魂の力」を増進し、「高潔な心」をもち、「生において偉大になること」をめざして「生活」を向上させることを意味している。ラスキンはそのことを要約して次のようにいっている。

「心情が強大、心が強大 つまり、心が偉大というわけですから「高潔」の意となりますが、こうであることこそすなわち、じつに生においても偉大であることにほかならないのです。こうなりつづけることこそ、じつにほんとうの出世、つまり「生の増進」^{アドヴァンス・イン・ライフ}をすることで 生そのものの増加であって、その装飾物の増加ではありません。」(Se., P.42, 訳, P.215)

ラスキンにあって、この「生の増進」を支える基礎になるのが「固有価値」と「実効的価値」というキーワードにもとづく「富」なのであるが、その問題は第五章で詳論することにしよう。

さて、それでは、「生の増進」をおこなっている人はどのような人間なのであろうか。ラスキンは「生の増進」をおこなっている人はどういう人間かについて、次のようにいっている。

「けれども、正しくは、心情がますますやわらかに、その血がますますあたたかに、その頭脳はますます敏活に、その精神は『いのちある平安』に達しつつある人、こういう人だけが生活の向上、つまり生の増進をおこなっているのです。」(Se., P.42~3, 訳, P.216)

この引用からうかがい知ることができるように、ラスキンの追求する「生を増進」し、「『いのちある平安』に達しつつある人」とルソーの追求する「有徳の人」とは完全に重なっている。そのことはラスキンの次の言葉によっても証明されるであろう。

「最大限の生は最大限の徳によってのみ成就されうるのである。」(U., P.157, 訳, P.144)

ルソーもラスキンも、共に、「利己心」に発する物質的富の増加にではなく、「文明的自由」の実現による「生の増進」に、「経済」の究極的目的を求めた思想家なのである⁽²⁴⁾。

第四章「文明的自由」⁽²⁵⁾の実現

「内部感覚」と「共通感覚」の復権にもとづく

ルソーの思想体系がめざすところは「『再生』による『脱自然化』」⁽²⁶⁾ということ、なかんずく、「『文明的自由』」「『道徳的自由』」と「『市民社会的自由』」の実現ということにあり、そこにあっては、そのための土台として、「内部感覚 (Sens intérieur)」と「共通感覚 (Sens commun)」とがすえられている。別言すれば、「内部感覚」と「共通感覚」を土台としてはじめて、「『再生』による『脱自然化』」、なかんずく、「文明的自由」の実現が可能であるとされているのである。

本章のテーマはルソーにあって「内部感覚」と「共通感覚」とは何を意味し、それがいかなる意味で「文明的自由」の実現の ひいてはルソー思想体系の 土台となっているかを論ずることにある。

1. 「内部感覚」について

ルソーはその諸著書で「内部感覚」あるいはそれに関連することがらについて、さまざまな言葉で言及している。

まず我々がみておかなければならないのはルソー思想体系の根底をなす次の言葉である。

「わたしたちにとっては、存在するとは感じることだ」(E., t. , P.600, 岩 中, P.17)。

この言葉は「人間（自分自身の）存在」の確実な根拠と、そしてそれを拠点としての「天地宇宙の存在」の確実な根拠とを、ルソーが、デカルトの「思惟」に対置して、「感性（感じること）」に置いたことの宣言である。私が「自分」を感じ、さらに、「対象（物質）」を感じるが故に、「私」

「天地宇宙」が存在するのだと。ルソーのいう「内部感覚」とは、この「私」が自分自身を感じる、その感覚なのである。ルソーにあって「文明的自由」の享受は、この、「内部感覚」をもって自分自身を感じる者だけに可能なものであることは、これからの展開が示すとおりである。

次にルソーが我々を救済するべく、つまり我々を自由と幸福に至らしめるべく、手を変え品をかえ、くり返しくり返し送りつづけたメッセージを紹介しよう。

「おお 徳よ！ 素朴な魂の崇高な学問よ！ お前を知るには多くの苦勞と道具とが必要なのだろうか。お前の原則はすべての人の心の中に刻み込まれはしないのか。お前の掟を学ぶには自分自身の中にかえり、情念を静めて自己の良心の聲に耳をかたむけるだけでは十分ではないのか。ここにこそ真の哲学がある。われわれはこれに満足することを知ろう。」(S., t. , P.30, 岩., P.54, °印は著者による)。

「情念」を静めて自分自身にたちかえり、「内なる良心」の声をかたむけなさい。その声を聴く人間に生得的な感覚が「内部感覚」なのであり、ルソー思想体系にあっては、「良心」「徳」の根底に息づくこの「内部感覚」が次に論ずる「共通感覚」とあいまって、人間と人間との、人間と自然との「同化」を可能にしているのである⁽²⁷⁾。

この「良心」「徳」の形成ということに関連して、ここで、言及しておかなければならない重要なことがらがある。それは「良心」「徳」の形成の根底に「内部感覚」と「共通感覚」「同化」が息づいているからといって、「感情」や「情念」側面の作用だけでは「良心」「徳」の形成には至らない、そのためにはどうしても、「理性」の作用とその所産たる「一般的抽象的真理」が必要であるとルソーがみている点である。そのことは次の言葉が雄弁に物語っていよう。

「抽象的な一般的真理はあらゆる有益なものなかでももっとも貴重なものである。それをもたなければ人間はめくらにひとしい。それは理性の眼目である。人間がいかに行動すべきか、いかにあるべきか、なにをなすべきか、いかにしてその真の目的を達するか、などを学べるのはそのおかげである。」(R., t. , P.1026, 岩., P.58)。

それではこの「良心」「徳」の形成に必要な不可欠な「一般的抽象的真理⁽²⁸⁾」はルソーにあっていかにして獲得可能なものとされているのであろうか。

結論をいえば「内観的方法」の採用が「一般的抽象的真理」獲得のための方策である⁽²⁹⁾。それは、「理性」が作用し、「心情」が確認し、情念の沈黙のうちに「内心の承認」を得てはじめて「真理」とみとめるという方法である⁽³⁰⁾が、この「内観的方法」の根底にも、「内心の承認」というかたちで「内部感覚」が息づいているのである。

ルソーにあってこの「内部感覚」は、さらに、「幸福 (félicité)」の土台にすえられている。

ルソーもまた人生の目的を「幸福」に置いた思想家である⁽³¹⁾。そのルソーが「幸福」について次のようにいうのである。

「私は、自分のうちに幸福を育てることをおろそかにしながら、遠くにそれを求めるのは空しいことを悟りました。なぜというのに、幸福がいくら外からやっつけ来ても、内部にそれを味わうことを知っている魂を見出さなければ、それは、はっきり幸福であるとは感じられないからです。」(道, P.523)。

ここでルソーは「幸福」とは「真に生きた」と感じることであり、その感覚は外部から与えられるものではなく、「内部感覚」をまっぴらに始めて味わえるものなのだといっているのである。このようにルソーにあって「内部感覚」とはルソーというところの「幸福になるための技術」 自分の「内なる声」に耳をかたむけ、自分にとって最も大切なものを自分自身のなかからひき出して生きるという技術 の根底に息づくものなのである。ルソーにあってはその技術にもとづいて「真理の松明を自分の魂の奥底にかかげて」(道, 全, t, P.503) 生きるものだけが、「幸福」をつまみ「真に生きた」という感覚をうることができるとされているのである。⁽³²⁾

さて我々はここで「内部感覚」について、さらに掘り下げて理解するために、「内部感覚」に関する、ピュッフォンの言葉を引用することにしよう。何故そうするかというと、『文明論』と『経済論』で論じておいたように、ルソーの「内部感覚」の理解とその重要性の認識は、大きくピュッフォンに負っていると考えられるからだ。

「われわれがわれわれ自身を知ることによってどんなに関心をもっていようと、われわれは一切のわれわれでないもののほうをよりよく知っているのではなからうかと思う。もっぱらわれわれの自己保存のために定められた器官を自然から授けられているわれわれは、それらの器官を、外部の印象を受け入れるためにしか使わない。つまり、われわれは自己を外に拡げ、自分の外に生存することをしかもとめない。われわれの感官の機能を増加し、われわれの存在の外的な拡がりを増大することにあまりいそがしくて、われわれは自分をそのほんとうの大きさにひき戻し、自己を自己に属さないすべてのものから区別するところのあの内部感覚をめぐって用いない。ところが、われわれが自分を知らたいと思えば、この感覚をこそ使用しなければならないのである。それはわれわれが自分を判断しうる唯一の感覚なのである。しかしどうしたらこの感覚にその活動とその全領域とを与えうるだろうか？ またその感覚の宿るわれわれの魂を、どうしたらわれわれの精神のあらゆる迷妄から救い出せるだろうか？ われわれはその魂を用いる習慣をなくしてしまっているし、魂はわれわれのさわがしい肉体的感覚にとりかまされていつも働かないでいる。それはわれわれの情念の火のためにひからびてしま

っている。心情、精神、感覚、すべてが魂に反対して働いたのだ。」ピュッフオン『博物誌』「人間の本性について」Hist.nat., *de la nature de l'homme*. (.t. ., P.195 ~ 196, 岩., P.134 ~ 135, ・印は筆者による)。

ピュッフオンにあって「内部感覚」とは人間が所有する二つの感覚のうちの、「肉体的感覚 (sensations corporelles)」に対する感覚である。「肉体的感覚」は人間の自己保存のための感覚であり、「外部 (対象)」から発せられた刺激を受容する感覚であるのに対して、「内部感覚」は「自分自身を判断し、自分自身を知る」ための魂に属する感覚である。

このピュッフオンの「肉体的感覚」との対比に於る「内部感覚」の理解は、そっくりそのまま、ルソーに継承されている。

またピュッフオンはこの引用文でさらに次のようにいっている。「文明人」は一方では「肉体的感覚」を外部からの刺激を受けとるためにのみ使用し、そのことによって、「情念の火」をたぎらせつつ自己を外に拡げ、魂をひからびさせつつ自分の外で生存することしか求めなくなり、他方では「内部感覚」の使用を忘れることによって、「自分自身を判断・確認」することを忘れ、自分自身を失ってしまっていると。

ピュッフオンは「文明悪」「文明人」の自己分裂と自己喪失の根源を「文明人」の「肉体的感覚」のみの使用と「内部感覚」の使用の忘却にもとめたのである。ルソーの思想体系はピュッフオンのこの思想の継承の上にうちたてられたと考えられるのである。

2. 「共通感覚」について

ルソーにあって「共通感覚 (第六感)」とは「内部感覚」の上に築かれる、「魂の力」と「肉体の力」とを媒介する人間能力であり、それは特別な器官をもたず、「魂」と「肉体」をつなぐ器官 頭脳 に座するものとされている⁽³³⁾。それはまた、「内部感覚」が生得的なものであるとされているのに対し、「実物教育」によって、経験的に形成されるものであるとされている。

「実物教育」によるその育成の必要性をルソーは次のようにいっている。

「しかし、たとえ視覚がかくもしばしばわれわれを欺き、触覚のみがそれを訂正するとしても、触覚それ自体も、じつに多くの場合にわれわれを欺くのです。それはいつも欺くわけではない、したがってそれを正すために六番目の感覚が必要になることはない、とだれが断言できるでしょう。」(道., P.512)

諸感覚は欺くことがある、つまり人間は「事物」を正しく受容することができないから、「事物」をできるだけ正確にとらえるためには、「共通感覚 (第六感)」の育成がどうしても必要である、というのである。

それでは「実物教育」によって育成される「共通感覚 (第六感)」とはいかなるものなのであろうか。ルソーはそのことについて次のようにいっている。

「つづく編において第六感ともいべきものの修得について語ることがわたしに残されている。それは共通感覚と呼ばれるが、それはすべての人に共通のものだからというよりも、ほかの感官の十分によく規制された使用から生じ、あらゆるあらゆるの総合によって事物の性質をわたしたちに教えてくれるからである。」(E.,t., P.417, 岩.上, P.270)

ルソーにあって「共通感覚(第六感)」とは諸感覚の十分によく規制された使用から生じ、五官によって受容された諸感覚(「肉体的感覚」)の上に立つ、それらの秩序づけられた総合「複合感覚」なのである。

この「共通感覚」という「複合感覚」の形成は「知覚」さらには「観念」の形成を意味する。ということは人間が受動的な存在から能動的な存在つまり「自然の体系」から離れて「文明の体系」を築く存在へと転換したことを意味する。何故なら感覚的判断は受動的であるが、「知覚」・「観念」による判断は能動的であるからだ。ルソーの思想体系にあってはこの差は決定的に大きいのである。人間は「天地宇宙の運行」に働きかける、「運動の原因」に転変するからだ。

ルソーが「実物教育」「共通感覚」の育成の重要性を強調する理由はこの点にこそ存在する。人間が受動的(「自然」「感覚」)存在にとどまるかぎり誤ることはないが、能動的になる、つまり運動の原因になるや否や人間は誤りを犯す「自然の道」から「逸脱」する危険があるからだ⁽³⁴⁾。

「共通感覚」が正しく形成されず、「感覚の欺き」「事物」とそれを受容する「感覚」との誤差が存在するかぎり、「魂の力」と「肉体の力」とはともなわず、「文明(魂)」と「自然(肉体)」との調和・統一は望むべくもない⁽³⁵⁾。反対に、「共通感覚」が正しく形成されて、「魂(文明)」と「肉体(自然)」が正しくつながれた時、つまり、「自然(肉体)」「感覚」「共通感覚」「観念」「魂(文明)」の往復運動がうまく成立した時、「自然」と「文明」との調和・統一が可能になるとルソーは考えたのである。

ルソーが「内部感覚」に支えられた「共通感覚」の育成を重視したのは正にこの点にある。

しかしルソーが「共通感覚」の育成を重視したのはこの点だけではない。ルソーはさらに「共通感覚」の有する「すべての人に共通する」という側面も重視している。ルソーは個に於る「共通感覚」の形成が、個の「魂」と「肉体」とをとり結ぶだけではなく、個の内面から発して人間相互をつらぬく、社会の「共通感覚」、つまり、「同感」と「コモンセンス」「気風」「風俗」「『共同体』の共通了解」のベースとなるとみているのである。

すぐこのあと論ずるように、ルソー思想にあっては、個から発し社会をつらぬくこの「共通感覚」が「内部感覚」に支えられる時、そこに人間相互の「同化」が可能になり、その「同化」のなかで人間は自分の自我を「共通の統一体」に移し入れることができるとされている。以下で詳論するように、「文明的自由」の実現はその時はじめて可能になるのである。

3. 「文明的自由」のベース

「内部感覚」と「共通感覚」にもとづく「同化」

本章の4と5で論ずるように、ルソー思想にあつては、「文明人」が「文明社会」の内部で「自由」を享受するためには、「徳」の形成が、そしてその「徳」の形成のためにはまずは自分自身との、次いで自分と他者との、さらには自分と自然との「同化」作用によって、自分の自我を「共通の統一体」に移し入れることが必要不可欠とされている。この「同化」作用による、「自我」の「共通の統一体」への移し入れを可能にするものが、「内部感覚」に支えられた「共通感覚」なのである。つまり、「内部感覚」に支えられた「共通感覚」があつてはじめて「同化」作用が可能になり、そのことによってはじめて、個は自分の「自我」を「共通の統一体」への移し入れることができ、その「共通の統一体」のなかではじめて「文明的自由」享受の前提となる「徳」を得ることができるのである。

「内部感覚」に支えられた「共通感覚」が「文明的自由」の土台となる、というのは以上の意味に於てなのだ。

以下、4と5で、「内部感覚」に支えられた「共通感覚」「同化」がいかなる連関で「文明的自由」の実現につながるかをみていこう。

4. 「道徳的自由」の実現

「道徳的自由」というのは文明社会に生きる「文明人」が自己の内なる「良心」の力をもって本能・感情・情念に発する衝動を抑止・統制して自分の「良心」の命令としての「義務」を果たすところにある「自由」であり、従つてそれは「良心」の育成・形成をまっしてはじめて可能になる「自由」である。ルソー家庭教育論にあつて「良心」の育成・形成は思春期の到来と共に始まる「積極的教育」によってなされるとされている⁽³⁶⁾。

「良心」育成をめざす「積極的教育」は大きく分けて二つの段階を経てなされる。

第1段階は「感情教育」である。そのめざすところは青年に芽生えつつある「自我（自己愛）」が「利己愛（amour propre）」によってエゴイスティックに閉ざされる以前に、人類愛を育成し、もつて青年の「自我」を「人類」という「共通の統一体」に移し入れることにある。

その移し入れは「内部感覚」と「共通感覚」をベースとする「共感的共苦（commiseration）」

「他者」と苦を共に感じ合い共鳴することによってなされる。自ら思春期の悩みをもつ青年が「共通感覚」「想像力」を得、「悩める人類のいたましい光景」に出会うと、そこで彼は他者との「共感的共苦」のなかで他者と「同化」し、「自分と同じような人間のうちに自分を感じ」、そのなかで自分の自我を人類という「共通の統一体」に移し入れていくのである。

青年の「共感的共苦」「同化」を示すルソーの言葉を聴こう。

「感覚の範囲がひろがってきて、想像の火が点火されると、かれは自分と同じような人間のうちに自分を感

じ、かれらの悲しみに心を動かされ、かれらの苦しみに悩みを感じるようになる。そこで、悩める人類のいたましい光景がこれまで味わったことのない感動をはじめてかれの心に呼び起こすことになる。」(E., t., P.504, 岩. 中, P.28)。

第2段階は「内部感覚」・「共通感覚」「人類愛」といったより高められた感情・情念にもとづいて「理性を完成させる教育」つまり「宗教教育」である。「サヴォワの助任司祭の信仰告白」で示される、あの、「内観的方法」をもって、「自分の内なる光」のみをたよりに、造物主の存在と「天地宇宙」の理法をつかみとり、もって自分の自己を「天地宇宙」という「共通の統一体」へと移し入れていく教育である⁽³⁷⁾。

「天地宇宙」という「共通の統一体」への自己の移し入れのなかで青年は、そこに於る自分の位置・役割・義務・使命を「直覚的明証性」をもって確信する。そこに「良心」が形成され、同時に、生き方の転換がおこなわれる。「自己」中心の生き方から、「共通の統一体」中心への、つまり「共通の統一体」という分母の分子として生きる生き方への転換である。この「中心の転換」のなかで、青年は本能や感情や情念の衝動・放縦を抑止・統制・秩序づける力、つまり、「良心」を獲得するのである。

ルソーにあって「道徳的自由」とは以上論じてきた論理によって形成される、「良心」という力によって、本能や感情や情念の衝動・放縦を抑止・統制・秩序づけ、自分の人間としての義務や使命を遂行するところに存する「自由」であり、「良心」にもとづいて一貫した人格を生きる「有徳」な「文明人」の享受する「自由」なのである。ラスキン思想にひきつけていえば、「道徳的自由」を生きる「有徳」な「文明人」こそ、「生の増進」を最高におしすすめている人間像なのだ。

5. 「文明社会的自由」の実現

ルソーの「政治理論」にあって「文明社会的自由」とは「特殊意志」と「一般意志」との合致に於て存する「徳」の下の「自由」、本章のテーマに即してもう少し掘り下げていえば、「公民」が自己の本能や感情や情念に発する「利己愛」部分を多く含む「特殊意志」を「政治体」という「共通の統一体」の「一般意志」「法」の力によって、統制し秩序づけるところに存する「自由」、つまり、「公民」が「法」の命ずるところを自分の義務として生きるところに存する、「公民」の享受する「自由」を意味する。

「公民」(「政治体」の構成員)の「共同保存」による「自己保存」と「文明社会的自由」の享受という二つのことの、同時実現を企てるルソーの「政治理論」(ルソー型「民主制」構想)にあっては、従って、その中心テーマは、いかにしたら「政治体」という「共通の統一体」に「人間」を移し入れて「共同の自我」を確立することができるか、そしてその上立って、いかにしたら「公民」の「特殊意志」と「共通の統一体」の「一般意志」とを合致させることができるかに置かれている⁽³⁸⁾。

ルソーはそのテーマに対して、まず、「全面譲渡的社会契約」「一般意志の指導」の論理をもって答えている。「全面譲渡的社会契約」によって「公民」を「精神的で集合体な団体」つまり「政治体」という「共通の統一体」に移し入れ、もって「共同の自我」をつくり出そうというものである。

「この結合行為は、直ちに、各契約者の特殊な自己に代って、一つの精神的で集合的な団体をつくり出す。その団体は集会における投票者と同数の構成員からなる。それは、この同じ行為から、その統一、その共同の自我、その生命およびその意志を受けとる」(Ct., t. , P.361, 岩, P.31)

ここでは詳論できないが、この「全面譲渡的社会契約」「一般意志」の指導の論理の帰結が「自由の強制」なのである。「一般意志 法」に従うことが「自由」なのであるから、「特殊意志」に従う「不自由」な「公民」に「一般意志 法」に従うことを強制して、その「公民」に「自由」を与えようというのである。しかしこの「自由の強制」の論理は、自己の「特殊意志」を抑止して「一般意志 法」に従うことが何故「自由」なのか、ということが解明的に理解されない限り、「不自由の強制」の論理に誤解されてしまうおそれがある。

「自由の強制」の意味するところは、「一般意志 法」が「公民」の社会的情念つまり「利己愛」に発する衝動・放縦「特殊意志」を抑止・統制する「力」をもつが故に、「公民」に「一般意志 法」に従うことを強制して「自由」を与えるということにある。このことを正しく理解するためには、さらに個人の「心的構造」に還元して論ぜられねばならないであろう。

「一般意志」というのは個人に還元していうならば、個人の悟性や理性の（「推論する」）力に発するものである。つまりそれは、ルソー（あるいはディドロ）の言葉でいえば、「情念の抑制のうちに推論する悟性の純粋な作用」なのである。

「じっさい、一般意志とは、各個人のなかにあつて、情念の抑制のうちに推論する悟性の純粋な作用であり、この推論の主題が、人間は同胞に何を要求しうるか、また、同胞は彼に何を要求する権利を持つかにかかわっているということについては、異論はまったく出てこないだろう。」(G.,t. , P.286, 全. 五, P.277)

ルソーは自己の内なる本能・感情・情念に発する意志（「特殊意志」）を自己の内なる「悟性の作用」に発する意志（「一般意志」）によって抑止・統制することができる時、そこに「自由」があると考えたのである。「文明社会的自由」とは個人に還元していえば、そういうものなのだ。

しかし、はたして人間は「悟性の作用」「悟性や理性」の力 のみによって感情や情念を統制・秩序づけ、もって、「自由」になることができるのであろうか。別言すれば、自己の「利己愛」に発する「特殊意志」を自己の「悟性の作用」に発する「一般意志」によって抑止・統制しきることができるのであろうか。

答はいうまでもなく否である。ルソーもまたそのように考えていたことは明白である。そのこと

を示すルソーの二つの言葉を紹介しておこう。

「情念を支配するには情念をもってするよりほかに道はない。情念の力によってこそ情念の压制と闘わなければならないのだし、いつも自然そのものから自然を規制する適当な道具をひきださなければならないのだ」(E., t. , P.654, 岩. 中, P.248)。

「闘って勝つことのできる者は火の魂の持主だけです。……冷たい理性は決して赫々たる事を何一つ行っただめしがないのであって、情熱に打克つには一つの情熱に別の情熱を対抗させない限り駄目なのです。徳に対する情念が盛り上がるに至れば、ただそののみが支配し、一切のものの平衡を保ちます。……ただ真の賢者ののみが情熱を情念自身によって克服するすべを心得ているのです。」(N., t. , P.493, 岩.(三), P.162, ・印筆者)。

「理性」は赫々のことをしたためしがない。「情念」を支配するには別の「情念」をもってするより方法がない。

ルソーのこの言葉をわれわれの当面の議論にあてはめてみれば、ルソーは人間が内なる衝動・放縦を抑止・統制して、「自由」になるためには、「悟性や理性」の力だけではだめで、「感情や情念」の助力がどうしても必要だと考えていたといえるのではないか。さらにいえば、ルソーは「利己愛」という低次元の情念に発する意志を克服するには「悟性や理性」の力だけではだめで、別のもっと高次の「感情・情念」つまり「徳への愛」をもってするより方法がないと考えていたのではないか。

「利己愛」という低次元の情念に打ち勝つ、「徳への愛」という高次元の情念!! それは「公民」の心にいかにして生ずるものなのか。

ここに登場するのが「内部感覚」に支えられた「共通感覚」の問題である。というのは「公民」に「徳への愛」が生ずるのは、「公民」相互が「内部感覚」に支えられた「共通感覚」にもとづいて相互に「同化」し、その「同化」のなかで自己を「政治体」という「共通の統一体」へ感情・情念の次元で移し入れられなければならないからだ。何故なら、ルソーの「政治理論」でいう「徳への愛」とは、自分の所属する「政治体」という「共通の統一体」への愛であり、さらには、その「共通の統一体」で自己が果たさねばならない「義務・職務・役割・使命」への愛に他ならないからである。

この愛ゆえに、「公民」は「政治体」という分母の分子として生きることができ、自己の「特殊意志」と「政治体」の「一般意志」との合致に於てある「徳」を得、「文明社会的自由」を強制されることなく生きることができるのである。

ここで詳論できないが、ルソーの政治理論にあつては「内部感覚」と「共通感覚」をベースとして「公民」の「感情・情念」を秩序づけ高次元の「感情・情念」を育成する役割は「公教育」と「市民的宗教 (Religion civile)」にまかされている⁽³⁹⁾。「公教育」は「祖国愛」の育成を「市民的宗教」はそこに於る「公民」相互の「共通了解」の育成と風俗・気風の純化をめざしており、かくして育成される「祖国愛」と「共通了解」の根底には、「内部感覚」に支えられた「共通感覚」が

息づいているのである。

以上論じてきたように、「内部感覚」と「共通感覚」をベースとして「公民」が「徳への愛」を獲得する時、その時「公民」は「祖国への愛」とそこに於る「義務への愛」故に、「強制」されることなく自己の「特殊意志」と「一般意志」「法」とを合致させることができ、「共通の統一体」に於る自分の義務を果たすところにある「文明社会的自由」を生きることができるのである。その時「公民」は「有徳の人」であり、文明社会の内部で、ラスキンのいう、「生の増進」をおしすすめているのである。

第五章「生の増進」

「固有価値」「実効的価値」の上に立つ

1. 経済学の目的 「生の倍増・増進」

ラスキンの経済論に一貫するものは「虚偽の経済学」と「真の経済学」との区別である。前者は「生から遠ざける」、さらにいえば、「生を破壊に導く」経済学であり、ラスキンの眼前で展開されている「経済」を支える「古典派経済学」に他ならない。それに対し、「真の経済学」というのは、ラスキン自身の経済学で、その目指すところは「生の倍増（multiplication of human life）」ラスキンはそれを生の増進、向上、拡大といろいろな表現しているにおかれている。

それ故ラスキンは「経済学」の目的を次のように定義づけるのである。

「ゆえにわれわれはさらにすすんで、ポリティカル・イコノミイの目的をもって『人間の生の最高水準における倍増』^{マルチプリケーション}であると定義せねばならない。」(M., P.5, 訳, P.35)

ここで「経済学」のめざす「人間の生の最高水準における倍増」とは、生命の維持・増進、健康で幸福な生活の持続・増進に加えて、「魂の生命」の増進を意味する。別言すれば、「生存」と「well-beingな生活」の拡大に加えて「性情」の向上「道徳」の向上・完成「肉体・性情および知性のもろもろの完成」を意味している。ラスキン自身の言葉でその具体的イメージを示すならば、「経済学」のめざすところは「元気のいい、眼の輝いた、心の楽しい人間をつくりだすこと」なのである。

この人間の「生の倍増・増進」を支えているのが「経済学」の中心テーマに置かれている「富」なのである。

それではラスキンにあってその「富」とはいったい何なのであろうか。

人間の生を疎外・破壊する「経済(学)」と人間の生を倍増を増進する「経済(学)」とを区別するラスキンの経済論にあっては、「富」もまた、「生を倍増・増進する富」と「生から遠ざける富」「富」の反対物に分けられている。

「富の眞の鉱脈は、深紅色であること 岩石のなかではなくて、肉体のなかにあること あるいはまたあらゆる富の究極の結果と完成が、できるだけ多くの元気のいい、眼の輝いた、心の楽しい人間をつくりだすことにあるということも、おそらくわかるであろう。われわれの近代の富は、むしろこれと反対の傾向をもっているように思う。」(U., P.64 ~ 5, 訳, P.92)

それではラスキンにあって「眼の輝いた人間」をつくる富（眞の富）と、「眼のかすんだ人間」をつくる富（富の反対物）とはどこがどうちがうのであろうか。

2. 「富」と「富の反対物」

ラスキンは「生の増進」を支える「眞の富」 「富」 の典型として「ティントレットの天井画」を、人間の生を疎外・破壊する「虚偽の富」 「富の反対物」 の典型としてパリで売られている「石版画」をとりあげ、後者について次のように論じている。

労働を価値の源泉と考えるならば、念入りに刻まれた石版石 石版画の方がティントレットの絵よりもはるかに価値が大きいはずである。何故なら前者に投下された労働量の方が後者に投下された労働量よりもはるかに大きいからである。しかし、とラスキンはつづける。しかしこの歓楽のための石版画はじつは「富」ではなく「富の反対の極にたつもの」である。パリの石版画はただの「財富」であるにとどまらなかった。それは、結局は償わねばならぬところの、眞実の「負債」なのであり、パリは正にこれらを生産するのに投じた労働量だけ、絶対的「貧乏」を超えるかわりに、それ以下に沈められたのであると⁽⁴⁰⁾。

ラスキンは何故かくも強烈に「石版画」 ブルジョア的富の象徴 を「富の反対物」として否定するのであろうか。

その理由をラスキンの「経済論」全体の議論から要約すれば、次の4点にまとめることができるであろう。

第1はそれが「マイナスの否定的な労働 (negative labour)」の所産であるからという理由である。第2は「否定的労働」の所産として出現するブルジョア的 「古典派経済学」的 「富」が「商業的経済 (mercantile economy)」を支える土台になっているばかりでなく、「他人を支配する力」、「他人の労働に対する支配力」 富者の貧者の労働に対する「法的、道徳的請求権」となってたちあrawれている⁽⁴¹⁾からであり、第3にそれが「娯楽の追求」という「国民的願望」を生み出すことによって国民全体を「無感覚、放縦、無慈悲」におとしこんでいるだけでなく、国民全体の「貪欲」を生み出すことによって戦争の原因になっているからである。

要するにラスキンはパリの「石版画」で象徴されるブルジョア的富を「否定的労働」の所産としての「塵芥」としてとらえたのである。

しかし、それにしてもラスキンは、何故、「パリの石版画」 「ブルジョア的富」に「塵芥」という言葉を与えたのであろうか。そこにラスキンがパリの「石版画」を「富の反対物」ときめつけ

る第4の決定的な理由がある。

その決定的理由とは、パリの「石版画」が「固有価値」にもとづいていない、「固有価値」を欠如している、ということである。ラスキンにあって「固有価値」にもとづかない、あるいはそれを欠如しているものは、たとえそれが人間労働の所産であっても、「富の反対物」、「塵芥」にすぎず、それは「生の疎外・破滅」に向かうとされているのだ。ラスキンにあっては、反対に、唯一「固有価値」にもとづくもののみが「(真の)富」なのであり、そののみが「生の増進」を支えるとされている。その典型としてラスキンは「ティントレットの壁画」をあげているのである。

それではラスキンにあって「生の増進」を支える「富」とはどのようなものをいうのであろうか。

「本有的価値と受容能力とがあい伴うばあいには、『実効的』価値、つまり^{ウェルス}富が存在する。本有的価値、受容能力のどちらかが欠けるばあいには、実効的価値は存せず、すなわち富は存しない。」(M., P.11, 訳, P.40)。

ここでラスキンは「富」というものを次の3点から説明している。

・「富」とは「実効的価値」である。

・「富」=「実効的価値」は「固有価値(本有的価値)」と「受容能力」があい伴う場合に存在する。

・「固有価値(本有的価値)」と「受容能力」のどちらか一方が欠ける場合には「富」=「実効的価値」は存在しない。

以上3点にまとめられるラスキンの「富」概念のなかに、ラスキンの「思想・経済学」の核がある。それ故我々はラスキン「思想・経済学」のキーワード、「固有価値」と「実効的価値」の意味内容を、さらに掘り下げて論ぜねばならない。

3. 「固有価値 (intrinsic Value)」⁽⁴²⁾

「固有価値」とはどのようなものであるかを告げるラスキンの言葉を紹介しよう。

「そしてヴァロールは健全であるとか強いとかいうヴァレーレから出たもの [もし、人間なら] 生に強い、すなわち勇敢である、[もし、ものならば] 生のために強い、すなわち貴重であるという語からきたものである。それゆえ『貴重で』あるということは、『生に対して役にたつ』ということである。だから真に貴重な、あるいは役にたつものは、その全効力をもって生につうずるものである。ものおよび人間の創造者から得た力は、尊重することによってひきあげられるものでもなく、軽蔑によって減るものでもないのである。」(U., P.118~9, 訳, P.122)。

ここでラスキンは次の3点から「固有価値」とはどのようなものかを論じている。

第1にそれは「生に役立つ」あるいは「生に通ずる」という意味で「貴重な」ものをいう。

第2にそれは「もの」および「人間」の生得的な力 「創造者から得た力」、「生賦与の力⁽⁴³⁾」として存在する。

第3にそれは人の「思惑(主観)」にかかわりなく客観的に「もの」や「人間」の固有な力として存在する⁽⁴⁴⁾。

以上をふまえた上でラスキンは「固有価値」について、次のような定義をくださるのである。

「固有価値とは、任意の物のもつ、生を支える絶対的な力である」(M., P.10, 訳, P.39)。

「もの」や「人間」のもつ、「生賦与」の「生を支える絶対的な力」。その実例をラスキンは「小麦」や「空気」や「草花」を実例にあげて、それぞれが「生賦与的」にもつ、それぞれの「生を支える絶対的な力」、「固有価値」について次のように説明している⁽⁴⁵⁾。

「一束の小麦」はそのなかに「人体の実質を保持する計量可能な力」を、「清浄な空気」は「人間の体温を保持する力」を、「一群の草花」は「五感および心情を鼓舞し活気づける力」を、それぞれ生得的にもっている。その「生賦与の力」が「固有価値」なのであると。

ここで我々はラスキン思想の核にあるものに接近することになる。

ラスキンにあってはこのような「固有価値」に支えられたものだけが、唯一、「富」なのであるから、「経済」の、ひいては「人間活動」のめざすところは、「諸物」の「固有価値」、「諸物」に内在する生賦与の「本有的」力を大切にし、それを最大限ひき出してあげるところにある、という思想である。「諸物」の「固有価値」の発揮は、「諸物」に内在する美の実現だからである⁽⁴⁶⁾。

しかしラスキン思想の核は、さらにその奥に存在している、と考えられる。それは人間の生命活動の発揮としての人間「労働」に関する思想である。さらにいえば、人間が自己の生命活動に於て自己の「固有価値」を発揮し、もって、人間自身が自己の内なる「富」を実現し、「富」のなかの「富」になれという思想である。

その思想をラスキンの我々への語りかけとして翻案していえば、次のような言葉になるであろう。

「皆さん、皆さんは、皆さんの内奥に息づく生賦与の力、皆さん自身の『固有価値』を大切にし、かつまた、それを最大限発揮・実現して生きなさい。その時皆さんは『諸物』に内在する『固有価値』を皆さんの作品として最大限ひき出してあげることができるし、皆さん自身の生を最大限増進させることができ、そのことによって皆さんは『富』のなかの『富』として自己の生を拡大・増進し、かつまた他の人々の生の拡大・増進に貢献できるのです。」

ここにラスキン思想の神髄がある。

しかしこのことについてのさらにたちいっての議論は「結び」の個所にゆずることにしよう。

4. 「実効的価値 (effectual Value)」

ラスキンの「富」概念は重層的である。

「固有価値」にもとづかない「財（もの）」は「富」として存在しないが、「財（もの）」が「富」であるためには、それが「固有価値」にもとづくものであるというだけでは不十分で、さらにそれが「実効的価値」をもつものでなければならない、とラスキンは論ずるのである。

それではラスキンにあって「実効的価値」とは何を意味するのであろうか。

「それゆえに、実効的価値の生産はつねに二つの要請をふくむ。まず、本質的に有用な事物を生産するということ、つぎにはそれを使用する能力を生産するということ、がこれである。」(M., P.11, 訳, P.40)

ラスキンはここで「実効的価値(の生産)」=「固有価値(の生産)」+「使用する能力(の生産)」であると規定しているのである。つまりラスキンは「財（もの）」はそれが「固有価値」をもつということだけでは「富」にはなりえない、その所有者が一定程度の「受容能力 (acceptant capacity)」をもっている時、その時はじめてその「財（もの）」は「実効的価値」を生じ、「富」として存在するのだと、それを使用する人間主体の側の、肉体的、情念的、精神的能力を問題にしたのである⁽⁴⁷⁾。

ラスキンはそのことを、次の言葉をもって我々にわかりやすく説明してくれている。

「一匹の馬も、われわれが乗ることができないならわれわれにとって富ではないし、一幅の絵も、これを鑑賞することができないならやはり富ではないし、どんな高貴な物も高貴な人間にとってのほかは富ではありえない。」(M., P.11, 訳, P.40)

つまりラスキンは「富」を『固有価値』を有するもの」の生産 蓄積 「もつ」という側面とそれを使用し享受することのできる「人間能力」の生産 蓄積 「できる」という側面の両面を強調し、その両側面から構成された統一物としてとらえたのである⁽⁴⁸⁾。

さて、富の重要な構成要素たる、人間の使用・受容能力の生産 蓄積ということは、とりもなおさずラスキン経済学がめざす、「生の増進」ということに他ならない。ラスキンの経済学にあっては肉体的にも、感情・情念的にも、精神的にも生を増進させればさせるほど、その人は「受容能力」を高めることによって「実効的価値」を生産し、より豊かな富を所有することができるとされているのだ。

ラスキンは自己の生を肉体的、感情・情念的、精神的に拡大・増進させて「勇気 (valor)」を得た人を「勇敢な人 (VALIANT)」と呼び、「富」を手短に次のように定義づけている。

「それゆえに富というのは、『勇敢な人による価値あるものの所有』ということである」(U., P.125, 訳, P.126)

5. 「生の増進」 「勇敢な人」の育成

最後にラスキンにあって、「生の増進」 「勇敢な人の育成」 「実効的価値の生産」を根本の

ところで可能にするものは何か、ということ論じて、本章を結ぶことにする。

それは、「固有価値」を有する、「自然」と「事物」と「人間」の協働による広い意味の教育人間づくり である、というのが筆者の結論である⁽⁴⁹⁾。

ラスキンは「生の増進」を可能にする、「固有価値」を有する事物を「価値ある有形物 (valuable material things)」と呼び、それを五項目に分類している⁽⁵⁰⁾。第1は「土地。これに付随した空気・水・諸生物をふくめる。」である。これを「自然」と要約しよう。この「自然」の「固有価値」が人間の生を増進させてくれるのである。第2は「家屋・什器・諸道具」であり、第3は「財蔵ないし予備の食物・医薬品、および衣服をふくめての身辺趣味用品」である。この第2項目と第3項目をまとめて「事物」と要約しよう。この「事物」の「固有価値」が人間の生を増進させてくれるのである。第4は「書物」、第5は「芸術品」である。第4と第5は人間の「固有価値」が実現されたものであるから、これらをまとめて「人間」と要約しよう。この「人間」の「固有価値」が人間の生を増進させてくれるのである。

以上、「自然」と「事物」と「人間」のそれぞれの「固有価値」による人間の「生の増進」「勇敢な人」づくり、それを筆者はルソーにならって「自然」と「事物」と「人間」の協働による「広い意味の教育」と呼んだのである。

ラスキンはそこで1項目から5項目までの、「自然」と「事物」と「人間」のそれぞれの「固有価値」による「生の増進」「勇敢な人づくり」「広い意味の教育」について論じているが、ここでは特に「土地(自然)」と「書物(人間)」のみをとりあげ、その「固有価値」による「生の増進」「勇敢な人づくり」の論理を簡単に紹介して最後の結びとしたい。

まず「土地(自然)」について。

ラスキンはその「(固有)価値」は二重のものであると論じている。第1は「食物および動力」を生むものとして。第2は観賞と思索の対象となって、「知力」・「美」を生むに至るものとして。「土地(自然)」のもつ、第1の側面の「固有価値」の発揮は、人間の肉体的「生の増進」を支えており、第2の側面の「固有価値」の発揮は、人間の感覚的、情緒的、知的「生の増進」を支えているのである。

ここからは「人間」と「自然」の調和の思想、さらには、人間による「自然」保護の思想が立出ると考えられる。

最後に「書物(人間)」について。

「書物」は人間(著者)の「固有価値」の発揮の所産である。ラスキンが「書物」によるつまりその著者の「固有価値」による「勇敢な人づくり」をことさら重視していたことはその主著『ごまとゆり』を読めば一目瞭然であろう。ラスキンはいう。「書物の価値は《第一》にそれが事実にかんする知識を保存し伝播させる力に存し、《第二》にそれが生命に発する・ないし高貴な感情と知的行動とを鼓舞する力に、存する」(M., P.15, 訳, P.44)と。

書物のもつ「高貴な感情と知的行動とを鼓舞する力」。著者の「固有価値」の実現たる「書物」

の「固有価値」は、そのような力としてルソーの言葉でいう「内部感覚」にもとづく「共通感覚」によって媒介され、著者と読者との心と心の「共鳴」のなかで、人間を「勇敢な人」へと育成していくのである。

以上論じてきたように、ラスキンにあっては、「自然」と「事物」と「人間」とが、相互にそれぞれの「固有価値」をひき出し合い、相互にそれぞれの「固有価値」を発揮するなかで「生の増進」がはかれるとされており、そこに「経済学」の目標がおかれているのである。

結び ルソーとラスキンからのメッセージ

ルソーは自分の同時代人の「肉体的感覚」の使用による「悲劇」を次の言葉で表現した。「あなた方の楽しみはすべてあなた方の外にある。……あの残酷な享樂に、どれだけの代価が支払われるのか」(道., P.506, ・印は筆者)と。

しかし翻って我々のまわりを見渡せば、ここでいう「あなたがた」とは我々自身のことではないであろうか。我々の時代こそ、「我々の外にある、あの残酷な享樂」にうつつをぬかしている時代の極にあるのではなからうか。

ルソーは近代という時代の「悲劇」から人間を救済すべく、ルソーの時代に、ひいては我々の時代に、次のようなメッセージを送ってくれている。

「内心の声」に耳を傾け、「その忠告に従うことを学んでください。あなたご自身のなかから、あなたにとって最も大切なものをひき出すことを学んでください。」(道., P.526)

「情念を鎮めて、自分自身に立ちかえり、自分の『内なる声』に耳を傾けなさい」。ルソーが彼の全作品でくり返しくり返し我々におくりつづけたこのメッセージは、近代という時代に対する、「内部感覚」と「共通感覚」の復権の要請であった。その理由は、ルソーが、「良心」という「美德に対する愛」は、「神聖なる熱狂」は、「低俗なる諸情念を抑止・統制する力・エネルギー」は、我々が「地上的な絆」から解放される時 別言すれば、我々が自分自身にたちかえって、我々を「地上的な絆（外部から来る享樂）」に結びつけている「肉体的感覚」から解放された時、はじめて発現するものであると考えたからである。

「この神聖なる熱狂は、われわれの諸々の能力がその地上的な絆から解放されるときに発せられるエネルギーなのです」(道., P.522)

ルソーは「内部感覚」・「共通感覚」 「内心の感情」をベースにしてはじめて、「良心」「有徳の人」の育成が、つまり、「文明的自由」の実現が可能になると確信していたのである⁽⁵¹⁾。

他方ラスキンからの我々へのメッセージを翻案すれば次のようになるであろう。

「皆さんは皆さんに生得的にそなわっている皆さん自身の『固有価値』を最大限発揮して、『全生涯において、これこそ自分にとって明白な一個の、もしくは一群の事項であり、これこそ、この世の陽光と土壌の分け前が自分にとらえさせてくれた真実の』自分自身の生の記念碑 生産物、業績、作品 であるというものを残しつつ生きなさい」と。

ラスキンは自分自身の「固有価値」の発揮としての 従って自分自身の人生の「証し」としての 自分自身の生の記念碑（生産物・業績・作品）とはどのようなものなのかについて、次のようにいっている。

「これが自分の精髓である。他の点では、食べたり飲んだり寝たり、愛したり憎んだりしたことは、他人と同様である。わが生涯は、たちまち消える霧のようなもので、いまや存在しない。けれども、これだけは自分が見つめ、考えたことであって、もし自分のうちで、なにか諸君の記憶に値するものがあるとすれば、これこそがそれなのである」(Se.,P.8,訳,P.171~2)

ここでラスキンは自分が生涯をかけて創り出したもの 業績や作品 は自分の「固有価値」の結晶つまり自分自身の「精髓」であるといっているのである⁽⁵²⁾。

ラスキンの「思想・経済学」は、以上の、人間の「固有価値」の実現ということを原点として、さらに、次の二つの側面でさらなる大きな広がりを含んでいると考えられる。

第1の広がりとは自分自身の「精髓」つまり「固有価値」の実現としての「生産物（作品）」が、他者（享受者）の心に語りかけ、働きかけて、両者の「共感」関係のなかで、他者の心を豊かにしていくという側面である。そのことは当然、逆に他者の「生産物（作品）」によって、自分の心が豊かになるということを含んでいる。つまりラスキンの「思想・経済学」は「人間と人間」との「共生・共創」関係 人間と人間とが「固有価値」の実現と「内部感覚」・「共通感覚」を土台とする「共感」ということを媒介として、相互に豊かにしあうという関係 への広がりを含んでいるのである。

第2は「人間と自然」、「人間と事物」との間の「共生・共創」関係という側面での広がりである。

人間が自己の「固有価値」を発揮しつつ、かつまた、「自然」や「事物」の「固有価値」を最大限ひき出しつつ、生産活動 つまり「プラスの労働」 をおこなう時、そこに、「人間と自然」、「人間と事物」との「共生・共創」関係が成立し、人間の「固有価値」と「自然」や「事物」の「固有価値」とが調和的に合一した「富」が創造されるという側面での広がりである。

ラスキンいうところの人間の「生の増進」 「勇敢な人の育成」は、以上論じてきたとき、人間の「固有価値」の実現ということを原点とした、「人間と人間」との、「人間と自然」との、「人間と事物」との、「共生・共創」関係に於てはじめて可能なのである。

そして、そのことが可能になるためには、そのベースに、ルソーのいうところの、「内部感覚」

「共通感覚」が息づいていなければならないことはいうまでもないのである。

最後にルソーとラスキンという二人の「鬼子」的経済思想家の、共通の「理念」を端的に表現している、ルソーの次の言葉をもって、本稿を閉じることにする。

「万人が生きるべきであり、何びとも富むべきではない。これこそが国民繁栄の根本原理である」
(Cr., t. , P.924, 全. 五, P.316)

以上、'04.11

(いいおか ひでお・本学経済学部教授)

注

- (1) 小宮山康朗は「効用と利潤と成長を追求する経済」がもたらす「文明の病患」の現代日本的あらわれを「渋谷メインストリート現象」としてとらえ、そこにみられる、「文明の病患」の病理を論じている。詳しくは小宮山康朗(2003)『『子供を消費者にする』社会を推進するのか? 『ホスピタリティ』アプローチへの注目』、「HOSPITALITY 第10号」を参照のこと。
- (2) その詳しい展開については拙著(2003)『ルソーの「経済論」 『本然』と『逸脱』』、高文堂出版社を参照のこと。
- (3) その具体的内容については Se., P.30~4, 訳, P.199~P.215 を参照のこと。
- (4) 「ヴィクトリア体制」にあつては「自然の美」という富を破壊して人工の「富の反対物」をつくり出している、というのがラスキンの基本認識である。たとえば次の言葉を紹介しておこう。「自然界で破壊した美のかわりに、黙劇の道化所作をとってかえす。」(Se., P.40, 訳, P.213)
- (5) 詳しくは Se., P.35~7, 訳, P.207~211、赤字印刷の部分参照のこと。
- (6) 「ヨーロッパにおける富の作用のすこぶるおそろべき形態は、不正な戦争を支持するものが、ことごとく資本家の富だということである。……資本家の意志のほうに戦争の第一根因となっている。が、じつは戦争の真の根因は国民全体の貪欲なのであって、これが国民に信念・率直さ・正義をもつことを不可能にさせ、したがって、いずれはかならず、各人に自分自身の損失と懲罰をもたらすのである」(Se., P.45~6, 訳, P.220~21)
- (7) 「いいかえればわれわれは、ただで食わせてもらいながら、あらゆる思想・感情を独り占めにすることができるようにと、一定数の百姓たちに耕作や溝掘りをさせ、またかれらをたいい暗愚なままにしておくのである。」(Se., P.28, 訳, P.224~5)
- (8) ラスキンは「ヴィクトリア体制」下の「賃労働・資本関係」の存在とその不正を見抜いている。しかし、その理解のしかたは独特である。まず財産上の不平等「持てる者」と「持たざる者」の成立を「分別・勤勉・節約」と「無分別・怠惰・浪費」とから説明する。「ひとりの賢明で分別ぶかい人物があつておおいに働き、少ししか費消せず、貯えをこしらえる。いまひとり無分別な人物があつて、これは少ししか働かず、生産したものはみな費消し、なんの貯えもこしらえない。」(M., P.148, 訳, P.234) ラスキンは「富者」と「貧者」の別れの根本原因を勤勉度、能力、運の良さと悪さ等にみているのである。その上で、その差が拡大する要因として、「道徳的」・「法的」抑制の欠如をあげている。「人間は、その勤勉度・能力・幸運および欲望の種々なるにおうじて、その獲得するところの世の富の分け前ならびにこれにたいする権利の大きさを異にする。これらの分け前相互間の不平等は、ある程度はつねに正当かつ必要なわけであつて、法律または境遇によって一定限度内に抑制せられることもあれば、無制限に増大することもある。力のつよい方、機敏な方、ないしは欲深な方の人々の意思や智慧の働きになんらの道徳的または法的抑制が加えられない場合には右の差異は巨大となる」(M., P.18~9, 訳, P.47) と。いま、かくして成立した、「富者(資本家)」と「貧者(労働者)」が「証文」をとりかわして、「労働者」が自分の労働を担保に入れて食料等を前借りしたとしよう。その場合、その証文が効力をもつのである。ラスキンはいう。「いまその証文がまったく効力をもつものとしよう〔文明諸国民の間では、その効力が法的諸手段によって保証されている〕。したがってこれまで二人前働いた男は、望みとあれば、いまはまったく仕事をやめ、無為に時をすごしても良いのである。そして、すでにこれまでかれが結んでき

た約束を、かれの相手に実行させるばかりでなく、かれが前貸しするにちがいない食料に対しても、さらにそれ以上にいくらかでも好きなだけ労働させる約束を強いるのである。この協定には、徹頭徹尾少しも不法〔この語の普通の意味で〕なところはないかもしれない。」(U.,P.52 ~4, 訳,P.86) 。ラスキンは「ヴィクトリア体制」下の「合法的搾取」の関係をこのように理解していたのである。

- (9) ルソーは「(純粋)自然状態」を構想して、そこに生きる「自然人」に、「人間の本源の構造」をみている。「自己愛」と「憐み」という自然の感情・情念と「自由な能因」と「自己完成能力」という人間に固有な特質から人間が構成されているという洞察がそれである。ルソーは「自由な能因」と「自己完成能力」という人間に固有な人為的能力の発揮・発動こそ、人間の文明化の根本動因であり、そこに於る「人為の失敗」が「文明の病患」をつくり出したとみているのである。なお詳しくは、『経済論』の、「経済」と「歴史」 自然成長的「文明社会」批判 の個所を参照のこと。
- (10) ここで「自然成長的な経済」というのは「感情」や「情念」さらには「利己愛」に従う「無計画的な経済」という意味であり、従って、「理性」や「良心」あるいは「法」によって統制されていない「放縦な経済」という意味である。
- (11) ルソーは「立法の力」と「事物の力」の角逐を次のようにいっている。「事物の力は常に平等を破壊する傾向があるという、まさにその理由によって、立法の力は、つねに平等を維持するように働かねばならない」(C.,t., P.392, 岩.,P.78)。ルソーの「民主制(共和国)」構想は、「立法の力」によって、いかに、「事物の力」を統制するかに、焦点があてられている。その詳論については『経済論』のV.,「経済」と「政治体」 「共和国」の構想 の個所を参照のこと。
- (12)「これとおなじようにして、この富も『その求められるところへいく』のである。人間のいかなる法則もその流れをとめることはできない。人間はただそれを導くことができるだけである。しかしこれは、水を導く溝と、これをしきる土手とできわめて徹底してなされるのであるから、それは生命の水知恵の手中にある富となるのである。あるいはその反対に、水をその勝手に流れるにまかせ、古来しばしばあったような、国家の災厄中、最後の、しかも致命的なもの、すなわちメラの水 つまりあらゆる害悪の根源をそそく水とすることもできるのである。」(U.,P.75, 訳,P.97)。
- (13)「自由放任」ではなく「徳性」をもって「経済」をリードせよというラスキンのこの思想は「事物の力」を「法の力」で統制しようとしたルソーの思想に対応している。
- (14)「わたくしの著作をつづじてとりわけしばしば強調した点があるとするならば、それは平等の不可能という一事である。わたくしの目的はつねに、ある人々の他の人々に対する、ときにはあるひとりのあらゆる他の人々に対する永遠の優越ということを示すこと、そしてまた、このような人々もしくはこのようなひとりに、そのすぐれた知識と賢明な意志に従って、かれらの下級の者を支配させ、指導させ、あるいはさらに必要に応じては強制屈服させるように、かれらを選定することが得策であることを示すことであった。」(U.,P.102, 訳,P.112)。我々はこの言葉からもラスキンの「哲人政治」思想の一端をうかがい知ることができる。
- (15)「それは、人間が骨格をもっていないと仮定するのではなくて、人間はすべてが骨格であると仮定し、この靈魂の否定の上に無味乾燥な進歩の理論をうちたてるのである。そして、できるだけ骨を利用し、頭蓋骨や上膊骨で多くのおもしろい幾何学的なかたちをつくり、これらの微粒子的構造物のなかに靈魂を再現することが不都合であることを手ぎわよく証明しているのである。」(U.,P.3~4, 訳,P.61)。
- (16)「文明的自由 道徳的および文明社会的自由」の実現ということと「生の増進」ということは、ルソーとラスキンのそれぞれの思想の核 「理念」 をなすものである。それ故、両者の類似と通底性を論ずることは、「近代文明」に立ちむかう「ルソー・ラスキン」的観点・根柢のなんたるかを確認することにつながるのである。
- (17)ただし、次の点は、正しく確認しておくことが肝要である。すなわちそれは、ルソーとラスキンとは、ラスキンが「ひとりの人間と他の人間 一匹の動物と他の動物との、高尚の程度のちがいは、まさに、一方が他よりも感ずるところが多いという点にあります」(Se.,P.23, 訳,P.194) と、人間的高尚さをもつば「感情」的側面においてのに対し、ルソーが人間的特質を「自由な能因」と「自己完成能力」という「理性」や「意志」的側面からとらえ、それを思想体系の柱にして、人間の合理的側面もまた重視しているという点に於て相異なる、というその一点である。
- (18)そして「正義」を知るには「理性」の働き(教養)が必要だと、両者は、共に、考えているのである。

- (19) ルソーの「良心」(形成)論については『文明論』の 、ルソー「文明論」の拠点第5章で詳論しておいた。参照のこと。
- (20) たとえばラスキンに次の言葉がある。「この触覚は、樹木のうちでは、ねむの木がそなえています、あらゆる生物にまして、純潔な女性がこれをそなえています。それは、理性を超越して感情が繊細で充実していることです。理性そのものの案内者・浄め手です。」(Se.,P.24, 訳,P.194)
- (21) ラスキンはいう。我々が図書館に入り、「先哲たち」という「あの『死者』の偉大な群れのもとにおもむくのは、たんにかれらから『真実』なものととはなにかを知るためだけではなく、主として、『正しいもの』とはなにかをかれらと共感しようとするためです。」(Se.,P.24, 訳,P.195)
- (22) 「それゆえ、わたくしはほとんどすべての労働は結局、簡単にプラスの労働とマイナスの労働に分けることができると思う。プラスの労働というのは生を生ずるようなものをいい、マイナスの労働というのは死を生ずるようなものをいうのである。」(U.,P.142, 訳,P.136) なおここで「マイナスの労働」とは「negative labour (否定的労働)」のことである。
- (23) 詳しくは『文明論』の の第2章、ジュリの「小さな共同体」 クララン農場という農業労働共同体 の個所を参照のこと。
- (24) たとえばルソーの次の言葉にも、そのことの一部が表現されている。「金銭の財宝をふやすために精神の財宝を犠牲にすることがないように注意しよう。われわれは、精神の財宝によってのみ、人間とその力のすべてを真に掌握することができるのであり、それに反して、金銭の財宝によっては、うわべだけの奉仕しか得ることができない。」(Cr.,t.,P.993~P.994, 『全』五.,P.328)
- (25) 「文明的自由」というのは「自然・未開状態」で「自然・未開人」が享受する「自然的自由」に対するもので、「文明状態」の内部で「文明人」が享受する「自由」を意味し、具体的には「道徳的自由(liberté morale)」と「文明社会的自由(liberté civile)」との両方をさす。筆者は両者をあわせて「文明的自由」と呼んでいる。
- (26) 『再生』による『脱自然化』というものは、簡単に要約するというならば、人間(人類)が文明的進化のなかで新しく生まれ変わり、生き方の向きを変えて、「自然人」から再生して「有徳人」として、文明社会の内部で、「文明的自由」を生きるようになること意味する。なお詳しくは、『文明論』の 、 、 および『経済論』の を参照のこと。
- (27) 「内部感覚」と「共通感覚」 人間と人間との、人間と自然との同化 「良心」の形成 「徳」「自由の実現」の論理は本章3と4で論ぜられる。なお詳しくは『文明論』の 4章、および の第5章を参照のこと。
- (28) ルソーにあってそれは「サヴォワの助任司祭の信仰告白」の個所に於て、体系的に論ぜられている。
- (29) 「内観的方法」の詳細については『文明論』 の第1章を参照のこと。
- (30) ルソーは自分が採用した方法の正しさを、つまり、その方法によって獲得した、自己確信として把握した「一般的抽象的真理」のゆるぎなさを、次の言葉で表現している。私への異論は「みんな言いがかりや形而上学的な小細工にすぎない、わたしの理性が採用し、心情が確認して、すべては情念の沈黙のうちに内心の承認を得たしるしをおびている根本原則にたいしてはなんの力ももたないのだ。」(R.,t.,P.1018, 岩,P.46)
- (31) 「人生の目的は、人間の幸福です。しかしわれわれのうちのだれが、そこに至る道を知っているでしょう。原則もなく、確実な目標もなく、われわれは、ああもしたい、こうもしたいと思い迷うばかりで、いくらかの欲望を満たした場合ですら、何も思いをとげなかったときと同じくらい、幸福からはるかに隔たっているのです。」(道.,P.503)
- (32) 「もしひそかに私を置き、たえず私の心に訴えかけて来る、この内心の声が、あなたの心にも同様に聞きとれるならば、その声に耳を傾け、その忠告に従うことを学んでください。あなたご自身のなかから、あなたにとって最も大切なものをひきだすことを学んでください。そののみが、運命に左右されることなく、他のあらゆる善の代わりをすることができるのです。これが、私の全哲学であり、幸福になるために、人間の用いうる技術のすべてなのです。」(道.,P.526)
- (33) 「この第六感、だから、特別の器官をもたない。それは頭脳のうちにあるだけで、純粋に内面的なその感覚は知覚、あるいは観念と呼ばれる。」(E.,t.,P.417, 岩上,P.270)
- (34) 「単純な観念とは比較された感覚にすぎない。単純な感覚のうちにも、わたしが観念と呼ぶ複合感覚におけると同じように判断はある。感覚においては判断は純粋に受動的で、それは人が感じているもの

- を感じていることを確認する。知覚あるいは観念においては、判断は能動的である。それは近づけ、比較し、感官によって決定されない関連を決定する。これが両者のちがいのすべてだが、このちがいは大きい。自然はけっしてわたしたちをだますことはない。わたしたちをだますのはいつもわたしたちなのだ。」(E.,t., ,P.481, 岩.上,P.366)
- (35)「魂と肉体をつなぐ器官がうまくできあがっていないければ、魂の力は肉体にともなわないということもわかる。」(E.,t., ,P.172, 岩.中,P.51)
- (36) ルソーの「家庭教育論」は「消極的教育」と「積極的教育」の2本立で構成されている。「消極的教育」の目標は「社会に生きる自然人」を育成することにあり、「積極的教育」のめざすところは、「自然人」を再生せしめて、「良心」にもとづいて生きる「有徳の人」を育成することである。なお詳しくは『文明論』の の個所を参照のこと。
- (37) 筆者はかつて、「サヴォワの助任司祭の信仰告白」のなかにもりこまれたルソー思想 特に「良心」の形成 について詳論しておいた。詳しくは「ルソー『文明論』の拠点」('01.2, 『高崎経済大学論集』第44巻3号, 『文明論』 に所収)を参照のこと。
- (38) ルソーの「政治理論」の詳細については『文明論』の および『経済論』の を参照のこと。
- (39) 詳しくは『文明論』の 第5章、および、『経済論』の 第5章を参照のこと。
- (40) M., PREFACE, ~ , 訳, P.5~6を参照のこと。
- (41) U., P.41~P.42, 訳, P.80を参照のこと。
- (42) 「intrinsic Value」を『ムネラ・ブルウェリス』(関書院)の訳者木村正身は「本有的価値」と訳しておられる。それに対し、池上惇はその著『文化と固有価値の経済学』(岩波書店)で「固有価値」と訳しておられる。筆者は「生賦与の力」をもつ、個々の「人」、個々の「もの」という、個々の「人」、「もの」の固有性の強調の意味をこめて「固有価値」という訳語をあてさせてもらうことにした。
- (43) 「『価値』とは任意のものがもつ生賦与の力である」(M., P.10, 訳, P.39)
- (44) 「人々が小麦なり空気なり草花なりを拒もうと軽蔑しようと、それはこれらのものの本有的価値にすこしも影響するものではない。使用されるかどうかにかかわりなく、それら自身の力がそのうちに存して、この独自の力は他のどんなものの中にも存しはしない。」(M., P.10, 訳, P.39~40)
- (45) また別の個所(U., P.119, 訳, P.122)では「空気」とか「光線」とか「清潔」の「固有価値」にもふれている。
- (46) 「自然保護」「国立公園」の実践はその思想的帰結であると考えられるし、また、その思想は、生産と消費の場で、「諸物」の「固有価値」を生かす、人間の「創造的生活」「美的生活」を可能にするものであると考えられる。
- (47) 「しかし、これらの物のもつこの価値が ^{イフエグチュアル} 実効あるものとなるためには、それを受けとる人の側において一定の状態が必要である。食物・空気あるいは草花が人間に十全の価値あるものとなりうるにさきだって、人間の消化機能・呼吸機能・知覚機能が完全でなければならない」(M., P.10~11, 訳, P.40)
- (48) 「読者は、所有すなわち『有すること』が、絶対的な力ではなく、ある段階をもった力であって、たんに所有されるものの量あるいは性質に依存するばかりでなく、また〔しかももっと大きな程度において〕それを所有する人にとってそのものがふさわしいかどうかということと、それを使用する人間の生命の力とに依存することを了解したであろうと思う。……そこでわれわれが物質の蓄積としてのみ考えたことは、能力の蓄積をもまた要求することがわかるのである。」(U., P.123, 訳, P.124~5)
- (49) ルソーの「家庭教育論」にあつては、そこでめざされる「有徳の人」づくりは、「自然」と「事物」と「人間」という三人の教師の協働のもとに、はじめて、可能であるとされている。ラスキンの「勇敢な人」づくりもまた、その三者の協働ということが、前提になっていると考えられるのである。
- (50) 以下の論理は M., P.11~P.14, 訳, P.41~P.45 を参照のこと。
- (51) ルソーは人間の「悟性」や「理性」の限界を次の言葉で表現している。「われわれは広大な宇宙のなかに、あてもなくほうり出されたためらの一群にすぎません。……われわれの持つつかすかな光明は、われわれの手と同じく、自分からたった二尺のところまでしか届かない」(『道』, P.510)と。しかし、我々が注意しなければならないのは、だからといってルソーが、人間の「悟性」や「理由」の側面を、決しておろそかにはしなかった、ということである。人間の「良心」育成のためにも、この「悟性」や「理性」の共働は必要不可欠なものであるとされている。サヴォワの助任司祭が自分の「持つつかすかな光明」つまり「内なる光」をたよりに、「抽象的な一般的真理」にたどりつき、そこではじめて「中心の転換」

ルソーとラスキン（飯岡）

がなされ、「良心」が出現するに至る論理については、すでに論じておいたとおりである。

(52) ここでラスキンは「書物」は著者の「固有価値」の結晶であるといっているのであるが、「書物」にかぎらず、「美術品」も、さらには靴職人がつくった「靴」も、その他あらゆる「生産物（作品）」は、すべて、その作者の「固有価値」の結晶とみることができる。ラスキンは、そのような自己の「固有価値」を実現する、「プラスの労働」に於いて、自己の「固有価値」の結晶をつくり出す生活を、我々にすすめているのである。